

---

# ルーラルレジェンド!!!

クロワッサン（企画開催中）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルーラルレジンド！！！

### 【Zコード】

Z8285L

### 【作者名】

クロワッサン（企画開催中）

### 【あらすじ】

鬼の血を引く少年、鬼崎和成は、一年の都会暮らしのあとに慣れ親しんだ日鬼村へ帰郷する。

代わり映えのない故郷に居心地の良さを感じる和成であったが、村にはダム建設の魔の手が忍び寄っていて

明かりもまばらな夜道を少年が歩いている。

右手に握られた紙袋が揺れていた。そこに印刷されているのは都内に店を構える老舗の和菓子屋のロゴである。

それだけならばまともであるう少年の左手には、長さ四メートルほどの金属の棒が握られていた。棒の一方の端を持っているというのに、もう一方の端が地面から浮き上がっていることから、彼が人智を超えた腕力を持つていることが容易に推察された。

少年は背中に三本の円柱を背負っていた。そのうちの一本から伸びたバルブは、少年の顔に装着されたガスマスクのようなものに繋がっている。

少年がふと足を止めた。右手に握られていた棒の先が地面に落ちて音を鳴らす。

左手の菓子を静かに地面に下ろした。まるでそれが危険なものであるかのように、菓子から十歩ほど後退して距離を取る。

突如として目の前の菓子に緑色の線が伸びた。少年が反応するよりも早く、東京銘菓の入った紙袋は闇の中へ飲み込まれていた。

少年は菓子を飲み込んだ闇の方へ目を向ける。

明滅を繰り返す古ぼけた街灯の下に人影があつた。よく見ればそれが年若く美しい少女であることがわかる。しかし、少女も少年と同じか、あるいはそれ以上の異質さを漂わせていた。

人間なら本来右腕がある場所に三角形をした異物が存在していた。底面三十センチ、長さは一メートルほどの大きさで、よく見れば植物のようにも見える。緑色の見た目はスイカバーにそっくりだが、黒い斑点は種ではなく無数の目だ。その「目」の一つ一つが生命体

であるかのように蠢いている。

先に動いたのは少女。正確には少女の右腕だった。ゴムの千切れのようないろいろな音を立てながら腕が枝分かれを始め、その一本一本が違った指向性を持つて少年の方へと飛びかかった。

「

少年はマスクを通した不明瞭な唸り声を残し、少女めがけて左手の金棒を振るう。

少女はそれを右腕の触手で受け止め、金棒の動きを封じ込めながら少年との距離を詰める。

二者の距離が五メートルに迫ろううとうきになつて、少年の頭上に火球が出現した。球は勢いよく少女の方へ飛び、爆ぜる。衝撃のためか少女の金棒に絡んでいた触手が緩んだ。少年は触手を振り切ると、右手と左手の一本の金棒を同時に振りかぶった。

命中するより早く少女が宙へ舞い上がる。

少年の目の前の地面には三本の触手が突き刺さっていた。

少年は続けて少女の体を支えている触手を狙う。金棒が触手にぶち当たつた。少年の狙いはその衝撃で体勢を崩すことだったが、少女は機転を利かせたらしい。素早く近くの木に触手を絡めると、殴られた勢いを利用して少年の懷へと飛び込んでいった。

振り切つてしまつたせいで金棒が動かなかつた少年は飛来してきた少女と正面衝突する。衝撃をもろに受けた後ろの坂へ吹き飛ばされ、そのまま側にあつた斜面を転げ落ちた。

背中に衝撃を感じたときには落下の勢いが死んでいた。どうやら生えていた木の幹にぶつかつたらしい。立ち上がるうとした少年の目と鼻の先に、良く知つた幼馴染の少女の顔があつた。

「おかいり

少女は声をかけながら少年の顔のマスクを外す。

「ただいま

これが少年 鬼崎和成が日鬼村に帰郷した日の出来事である。

「一〇二のけたたましい鳴き声で鬼崎和成は目を覚ました。

「……五時か」

傍らの携帯電話の背面ディスプレイを見た後、和成はげんなりして様子で声をあげる。もう一度布団に入り込んで瞼を閉じるが、安眠妨害の主である一〇二は鳴き止もつとしない。

「はあ」

春休みだというのに何が悲しくて五時起きしなければならないのかと思いながらも、仕方なく掛け布団を跳ね上げて起き上がった。深く息を吸う。口呼吸と鼻呼吸の両方を交互にすると、ヒノキの香りが和成の肺と鼻腔とを満たした。

覚醒しきらない頭で部屋を見回す。古風な木造建築の部屋は、高校の教室と同じぐらいのサイズを誇っている。そこまで考えて自分が幼馴染の家にいることを理解した。

（なぜ？）

更に昨日何があつたか思い返そうとして、襲われたことを思い出す。帰郷してきた和成は、まず自分の荷物を整理しようと思い立つてダンボールを開封し始めた。片付けをしていたらゲームボーイとテトリスのカートリッジが出てきたのでなんとなくプレイしていだところ、幼馴染の家の方に異質な空気を感じ取った。慌てて武装して駆けつけてみれば、あるうことか幼馴染の少女に襲撃されるという事態に陥つたのである。

なぜか喧嘩を売つてきた少女を相手に意味もなく金棒を振り回すことになつたところまでは覚えている。どうやらその後幼馴染の家に連れ込まれたようだ。。

「おはよ。フリードリヒ君がいるから目覚ましにいらすでしょ」

隣の布団から這い出してきた少女が一〇二と笑いかけてくる。

「……よく二ワトリを判別できるよな」

ドイツ人男性のよくな前の一ワトリを頭に思い浮かべようとしたが、和成には鳥類の顔や鳴き声を見分ける能力は備わっていなかった。

「なあ、なんでお前はどうして隣で寝てるんだ」

和成はやや不満げにそう伝える。行動の意図が読めなかつた。  
「私の家なんだから何処で寝ようと勝手じやない。ああ、父さんも母さんもいなわよ。兄貴のトロに出かけてそのまま泊まつてくるつてさ」

「夜這いの危険性は考慮したか」

和成も高校一年生の健全な男子である。紳士的だと評されることが多いのは確かだが、それでも何か間違いが起こる可能性がゼロとは言えない。

「朝日が拝めなくてもいいならお好きにどうぞ」

少女の黒い笑みを受けて少年は押し黙る。しばらくして、「よし」というかけ声とともに少女 百田鬼臘月 が起き上がつた。

身長は同年代の女子にしては高めで、百七十ちょっとある和成よりも少し低いぐらいだった。化粧つけはないものの、全体的に彫りが深く、目鼻がすつきりと通つていてやや日本人らしくない風貌をしていた。同じ年の少女なら都会の学校でも見てきたが、それとは比較にならないほど大人びている。

容姿の一つでも誉めてみるかと思つた和成の前で、臘月は部屋の隅に備え付けられている小型冷蔵庫からペットボトルを一本取り出した。口にして一言、

「つかあー、うまい！」

まるで会社帰りのサラリーマンのようにそのフレーズを口にする。

「相変わらずジンジャーイールか」

小学生の頃に和成が作つて飲ませたものをえらく気に入つたらしく、以来ずっとジンジャーイールが手放せなくなつてゐる。ほどんどう中毒のようだつた。

「これが無いと一日が始まらないじゃない」

「いつか糖尿病で死ぬぞ」

「町で売ってる清涼飲料水よりは体にいいと思うけど」

そう答えて一口目を流し込んだ皐月に、和成は嘆息して首を左右に振った。早朝五時の空きつ腹にジンジャー・エールを流し込める少女というのは確実にマイノリティな部類に入るだろう。

「どうでもいいけど春休みなのに朝早いのな」

「実は今日学校あるんだよね」

「はい？」

和成はスケジュールが違うのだろうかと考えて、それは無いだろうと思い直す。幾ら日鬼村が辺境の村とはいえ、春休みは同じように確保されているはずであった。

「ホシュウがあるのよ」

「補習？ 赤点でもとつたのか？」

「違う違う。直す方の補修。学校、ぶつ壊れちゃってるんだ」

和成は反応するのに間を要した。学校が壊れているという状況をにわかには理解できなかつたからだ。

「はーあ!? なんで?」

「落雷」

「避雷針があつただろ?」

「偶然折れてたのよ。いやね、その前の日に補修はしたんだけど、やつぱりガムテープじゃ駄目だったみたい。休みの日に落つこちたおかげでケガ人はいなかつたから大丈夫」

「……」

「まあ、見に行けばわかるでしょう。とりあえずご飯ご飯」

皐月は笑い、ジンジャー・エールをまた一口飲み込んで、キッチンの方へと歩いていった。

「疲れそうだな……」

まさか帰郷した日に学校が壊れると伝えられると誰が予想し得ただろうか。面倒ごとがおきている予感からか、体中に倦怠感が湧

き上がつてくる。

和成は皐月の背中を見送ると、布団の中へと引っ込んで再びそのままを閉じた。

一度寝をして皐月に小言を言わながら食事を終えた和成は、着替え中らしい皐月を尻目に一人で屋外へと足を踏み出す。

しばらく経つても姿を現さない皐月に催促の言葉を叫んだところ、トイレ、と大声で返事が返ってきた。恥も外聞もない幼なじみに、しかしどこか安心感と安定感を覚えた。

百田鬼家の庭は都会の幼稚園や保育園の校庭より遙かに広い。基本的に日鬼村は農村であるため、どの家の庭もかなりの広さを誇っている。

庭の隅には一本の金棒が転がっていた。和成の武器である「金碎棒」だった。先祖代々伝わる由緒正しい金棒で、水に漬けていても絶対に錆びないという性質からいろいろと役に立っていた。戦闘に使うのはごく希で、漬物の重石にしたり、物干し竿として使ったりと、その用途は多岐にわたる。

庭の中央にある大ききな切り株の上に三十センチほどの木材が乗せられていた。和成はそれを凝視しながら静かに呼吸を整えた。

「と！」

掛け声と共に手刀を振り下ろすと、木材がいとも簡単に真つ二つになつた。普段の和成と比較するとやや威力不足なのは、恐らく昨日の夜に無駄に能力を使使したからだろう。あとで皐月に文句を言わなければならぬと思いながら機械的に薪を割っていく。

超人的なペースで一山分を叩き割つた。腰が痛くなつてきたので得物を手斧に切り替え、もう一山の方へとそれをひたすら振り下ろした。

「……さみ」

裏庭に積んであつた百本ほどの薪を叩き割つた和成はその場で体

を震わせた。まだ三月末なので春の陽気は期待していなかつたが、やはり都会と比べると想像以上に寒かつた。高地にある山村という都合上、気温は県内の平均気温より五度は低い。雪こそ降つていなが歩くたびに足元の霜が音を立てていた。

和成の服装は迷彩柄の長ズボンにカーキ色の長袖ワイシャツ、その上に黒いベストというものだつた。中学時代に皐月の家に泊まつてから置きつ放しにしていたものなので、やや小さくて着心地が悪い。自宅に帰つて着替えようかと考えた和成だつたが、皐月の家から自宅までは徒步で二十分もの距離がある。学校の補修がある以上、往復四十分をかけている余裕はないと判断した。

自分の家の方角になんとなく目をやる。まだやや暗い道路上に、薄霧を裂くようにして陽光が降り注いでいた。照らし出される世界は精緻な絵画や高画質な映像でも再現できないほど鮮やかで、純粋な感動を通り越して馬鹿馬鹿しいとすら思えるほど美しかつた。

ふと、和成の背後からエンジンの駆動音が聞こえてきた。振り返ると同時にバイクに乗つた皐月に肩を叩かれる。

「「めんごめん。遅れた つと。薪割りありがとうね」

皐月の口から吐き出される息は和成のそれと同じように白かつた。デニム地のハーフパンツを履き、Tシャツを着た上に短い黒のジャケットを羽織つていた。まるで初夏のような格好であり、和成よりも更に薄着だつた。

「どういたしまして。どうでもいいけど、視界にいれると温度が下がりそうな格好だな」

「なーに言つてるの。こんなんじゃまだまでしょ。ハヤちゃんなんか雪降つてもノースリーブのシャツに作業用のズボンだからね」和成は、ハヤちゃんと呼ばれた幼馴染の姿を頭の中で思い描く。確かに記憶の中の彼は一年中そんな格好をしていた。どうやら都会暮らしで温かい部屋に慣れてしまつた和成の方がずれでいるらしかつた。

「格好よりも注目すべきはハヤちゃんの」

皐月は自慢気にバイクを指したが、和成の表情はやや陰つていた。

「スピード狂の人間がバイクに乗つて、しかもそれに乗せられそうとなりやあ視界に入れたくもなくなるさ」

和成は彼女が跨つているバイクに目をやる。

ホンダのホーネット・デラックスだつた。スズメバチをモチーフにしているらしく、黄色と黒のツートンカラーの攻撃的なデザインが特徴的である。サイドミラーは蜂の目のように、バイク前面の大きなヘッドライトも目をひいた。排気量は一百五十分、最高速度百八十キロオーバー。和成はそれほどバイクに興味があるわけではないが、かつてとある人物から毎日のように説明を受けていたためにかなりの見識があつた。

「弥生さんのだよな」

「譲つてもらつた」

皐月の兄である百目鬼弥生はバイクに凝つっていて、庭を拡張して自分専用のバイクガレージを作るほどだつた。このホーネットも皐月が中学生の頃に「いずれ使うから」として弥生が買い与えていたことを覚えている。しかも皐月は当時から暇さえあれば兄とともにバイクを乗り回していたため、十六歳という年齢にそぐわないテクニックを誇つっていた。

「さて、じゃあ学校に行きますか。後部座席は慣れてるよね？」

「……スピードは出すなよ」

和成は一応の忠告を試みる。皐月の兄は県内最速という噂まで立てられるほどのスピード狂であり、たまに乗せて貰うたびに一度と乗るまいと心に誓つたものだつた。残念なことにその精神は妹にも脈々と受け継がれており、彼女が御するバイクを見るたび、和成は幼少時のトラウマを思い出すのであつた。

「分かつてゐるつて。怖いの？」

学校までの距離は徒歩で三十分ほどなので、和成や皐月の家から通うなら自転車なりバイクなりを使ったほうが無難である。それは

理解していた和成だつたが、ドライバーが臥月となるとやや遠慮したい気持ちが強かつた。

「正直かなり怖い。びびつて胸とかタッチするかも」

「驚いて百八十キロまで速度あげちゃうかも」

「冗談に対する臥月の切り替えしは脅迫だつた。和成は渋々といつたようにホーネットにまがると、臥月の腰に手を回す。

「しゅつぱーつ」

臥月がエンジンをかける。

高く、それでいて重厚な排気音はさしづめスズメバチの羽音だろうか。二百五十分とは思えない加速を見せて、勢い良く道を走つていく。バイクといえばホンダのスーパークーパのような低排気量バイクが主流である農村において、カラーリングを抜きにしてもホーネットは異質な存在だつた。

もつと揺れるのかと思つてはいた和成だつたが、意外と座り心地がいいことに気づいて満足する。臥月の方に体を押し付ければもつと安定するのだろうが、恥ずかしさがあつて腰に手を回すに留めていた。

下り坂に差し掛かつて体が前に傾く。前のめりになつた和成は、臥月の髪から漂う甘い香りに思わず顔を背けた。

あたりの家屋は和成が最後に訪れたときと何ら変わつていない。見える家はかやぶき屋根が五割、瓦屋根が五割といったところだつた。

「免許いつとつたんだっけ?」

まさか無免許という事はないだろうと思いながらも、小学生の頃は実際に無免で走り回つていた少女を思い出して疑問を投げかけた。

「去年の夏休み。足があるつていうのは何かと便利だからねー。和成は取らないの?」

「通つてた学校がとつちやいけないつて校則があつたんだよ

「えー、別にバレないでしょ?」

「それが意外と厳しくてな。後は精神的な問題。三年の先輩が夏休

み明けたら白黒写真になつてた事件があつてな

「それは……確かに乗りにくいかもしれない」

和成は代わり映えのしない風景を眺めながら幼馴染と話を続ける。定期的に帰つてきつていたこともあり郷愁を感じる事はなかつた。

欠伸を二度三度かましながら清浄な空気を堪能する。排気ガスで薄汚れた都会を思い出して、もう戻りたくないものだと考える。

和成が都会の高校に転校した理由は、ただ単に「なんとなく」であつた。自分より遙かに頭のいい妹が、都心にある国立の中学校に入学したため、それに付き合つて村から出ただけだ。

一年間の都会暮らしに面白みを見出せず、一人で村に戻つてきたが、やはり自分の選択肢は間違つていなかつたと確信した。

「そうそう、昨日のお土産ありがとうね」

「人から奪い取つておいてなんなんだよ……しかもあれ、皐月の分以外も入つてるんだぜ」

「私が配るから大丈夫」

「なんで俺の土産を皐月が配るんだよ」

「いいじやない。カズ君のものは私のものつてことだ」

「少しさは自重しろよジャイアン」

和成は無駄とは知りつつ説教をしてみて、やはり無駄だと確信した。

冷たい風をかわすように頭を下げる。朝の風が気持ちいいのは春先から夏までの間だけで、それ以外の時期は身を凍らせる殺人兵器以外のなにものでもない。

「あらら。七時集合なんだけど間に合つかな」

腕時計を確認した皐月が急に姿勢を低くした。空気抵抗を減らすつもりなのだろうか。嫌な予感がして和成は身を固める。

「おい皐月」

「いえい」

軽い声と共に皐月が速度を上げた。突然の急加速に和成はバランスを崩してつんのめる。気がつけば三十キロを指していたメーター

が七十キロにまで跳ね上がっていた。

「つぶねえ！ 振り落とす気か！」

「三輪車だつてもつと早く走るでしょ」

「走るわきやないだろ！」

叫ぶ和成をよそに、ホーネットはゆっくりと加速していく。メーターの針は既に八十のあたりを指していた。開けた土地なので視認性がいいとは言え、八十キロで疾走するのはやはり危険と言えた。おじいさんやおばあさんが急に路肩から現れでもしたらまず回避できないスピードである。

「スピード落とせ！」

皐月が仕方ないなあ、と呴いて速度を落とす。それでも五十キロオーバーのスピードでなかなかに速い。もつとも、日鬼村には警察がないので、たとえ百キロを出していようが人を撥ねない限りは捕まる事はないのだが。

未だ不満を垂れ流している和成を気にしてか、皐月は徐々にスピードを落としていった。時速三十キロほどで走っていると、今度は皐月が文句を垂れ流し始める。

「免許取つたらツーリング付き合つてやるから。中免取つたら高速でもなんでも走つてやる」

「嘘ばっかり。免許取つてから一年間は高速走れないんだよ？」

「……マジ？」

「マジです……ああ、何か悲しくなつてきたら手が」

メーターがぐんぐんと上がり始める。それに比例して和成の表情が悲壮感を帯びたものへと変化していった。

「なんでもいい！ 代替案を何か出してくれ早く！」

「えー。そうだなあ、春休み中に買い物に付き合つてくれればいいよ」

「オーケー！ それでいいじやないか！」

和成の返事を受けてゆっくりとメーターが下がっていた。ほつとした顔で溜息をついた和成の様子を知つてか知らずか、皐月がけら

けらと声をたてて笑つた。

「嫌がらせか……」

「だつて可愛いんだもん」

「くそ、舐めやが なんでもないです」

失言は即座に速度上昇に繋がる。事前に危険を察知した和成は言葉を引っ込んだ。

高校までもう少しとこりで、道路脇に一台のトラックが止めてあるのが目に入る。荷台には大量の木材が乗せてあり、周囲を同年代くらいの少年少女たちが取り囲んでいた。

ギラギラしたメタリックブルーで塗装されているトラックは、村で材木屋をやっている佐藤家のものに違ひなかつた。

「佐藤さんとこのトラックか……家でも建てるのか？」

積まれた大量の資材を見て和成が声をあげる。

「ブー。全部学校の補修用です」

「はあ！？」 四トントラック目一杯だぞ？ 校舎はどんな状態なんだ？」

「あれでもたぶん足りないかもしれないって状態」

「……」

和成は絶句する。

「とりあえず挨拶しようよ。なーんかエインストしてるくせこしね」

皐月はトラックの側まで近寄るとホーネットを止める。地面に降り立つた和成に、トラックの周囲にいた友人たちが声をかけてくる。

「和成！」

「お、カズじやねえか！」

「かずきくーん！」

「ただいま」

寄ってきた仲間たちに声をかける。小学校も中学校も同じだった人間がほとんどで、全員が全員幼馴染のようなものだつた。彼らは何故かトラックの荷台を先頭にして列を成していた。どうやらトラックの荷台に乗っている木材を一本ずつ引き抜いて運搬しているよ

うである。

「このトラック、エンストしてるのか？」

和成の言葉に近くの少年が返事をする。

「ああ。仕方ないからこいつやつてちまちま運んでるんだ。お前もちよつと手伝ってくれよ。カズなら一、三本は余裕だろ？」

そう言つと少年は五メートルはある木材を軽々担ぎ上げた。

日鬼村に住む者のほとんどが、人間以外の血が混ざつているか普通の人間には使えない業わざが使えるかのどちらかだつた。例えば和成や皐月は、血筋としては「鬼」の血を引いている。

しかし鬼だからといつてどうこうという話はなかつた。人さらいもしなければ、もちろん人を食べることもない。皮膚も赤くなれば角も生えておらず、要するにただ腕力が優れているだけで、他は人間と言つてよかつた。肝心の力も都会暮らしでは使う機会に恵まれないが、先ほどの薪割りのよつた力仕事をする際には鬼の力は大いに役に立つていた。

「どうしたの、カズ君？」

トラックを見つめたまま棒立ちしていた和成を見つめ、皐月が疑問の声をあげる。

「ちょっとぞいてくれ」

和成は手振りで周囲の人間を引かせる。後部バンパーに手をかけた和成の姿を見て、皐月や友人たちが怪訝な顔をした。何をしようとしているのかを推測することは簡単でも、それが現実に実行できると思う者は流石にいないようだつた。

「……なに、押すつもり？ できるの？」

皐月の言葉は恐らくその場の総意だろう。和成は首を小さく振つた。

「分からん」

適当に返事をして一呼吸を置くと、両手を揃えてトラックのバンパーに添えた。

外界の声を遮断して意識を一点に集中させる。

「は！」

掛け声一つとともに両腕に力をかける。ゆっくりと四トントラックが動き始め、大量の材木を積んだままのそれがのろのろと動き始めた。

人の身でないことを考慮しても破格の怪力であることは、周囲の村民たちが沸き立っていることからも明らかだ。顔を赤くしながら、全力でトラックを押していく。

「すっげえええ！」

「嘘でしょ！？ ええ？」

「日鬼童子の本領發揮だな」

懐かしいニックネームで囁き立てられて悪い気はしなかつたが、やはり一人で押すのには重すぎた。全力で能力を使えるほどには回復していないこともあり、このままでは校庭に着く前に力尽きるだろう。

「頼む、だれか手伝ってくれ」

「おう！」

「おっしゃ見てろよ女子ども！」

周囲の男子が和成と一緒にになってトラックを押し始める。掛け声をかけながら神輿みこしを担ぐような勢いで力をかけた。

「お先つ！」

呼吸を荒くしながらトラックを押していく男子たちを尻目に、皐月が揚々と走り去っていく。

「汚ないぞ！ おい！」

「皐月のヤツ……！」

怒りより呆れの強い声音で男子たちが文句を投げかける。皐月に後押しされたのか女性陣たちもその場から去っていった。

「女つて冷たいよな」

「お前とはい酒が飲めそうだ」

疲労を誤魔化すための雑談を交えつつ百メートルほどの距離を進む。トラックの前輪が校庭に入り込んだところで押すのをやめ、大

きく息を吐いた。

「……この辺りでいいのか」

「おう。ありがとな！」

和成は返事の替わりに手をひらひらと動かした。疲れた肩を一度三度回し、大きく息を吐いて 大きく吸い込んだ。

それから静かに校庭を見回す。この間まで通っていた都立高校の校庭は灰色の砂に覆われていたが、こここの校庭は黄土色の土に覆われていた。花壇には色とりどりの花が咲き乱れ、周囲には鬱蒼とした森が広がっている。

全校生徒はわずか七十名。各学年一クラスずつしかない、「日鬼農業高校」がそこにあった。日鬼村唯一の高校ということもあり、普通に大学進学を目指す人間も多く通っている。しかし、和成が最後に目にしたときはその装いを大きく変えていた。

「……ひつでえな」

校舎に目を移して和成は嘆く。

雷が落ちたらしい校舎はほぼ大部分を損失していた。壁面が黒く焦げているところを見ると、どうやら雷が原因で出火したらしい。隣の更衣室にも崩落した木材が突き刺さつており、プールには大量の木片が浮いていた。

半壊どころか全壊である。こんな場所で授業をするのならば、まだ校庭に椅子と黒板を持ち出して授業をしたほうが集中できるというものだろう。

愕然とした表情で校舎を見つめていた和成の耳に、聞き覚えのある少年の声が聞こえてきた。

「おーう！ 我が友よ！ 会いたかつたぞ！」

重永颯しげながはやてが手を振りながら駆けてきた。空いた方の手に木材を抱いだまま突進してくる姿に和成は恐怖を覚える。

「攻城じやあ！」

「やめろ颯！ 降ろせ！」

颯はその場で急ブレーキをかけて立ち止まると、手に持っていた

木材を脇に放り投げて和成の方へと駆け寄った。

「久しぶりだなあ和成！」

感慨深そうに頷いた颯は和成の背中を叩いた。和成はその顔を軽く睨んで、

「どこがだよ。冬休みに来たから一ヶ月か三ヶ月前には会つただろ」「この村にいりや一時間に一回は会うんだから久しぶりだろ」

「そりや……」

反論しようと思つてできないことに気がついた。確かに村にいる間は颯とは一日に十回は出会つていたように思える。都会と山村では言葉の定義すら違つていて「う」とことを、和成は思い出し始めた。

「そうだよな。俺も村の感覚が抜けてるかもな」

きりつとした顔立ち、少し手を入れているのか細く鋭い眉は現代風で男前だつた。しかし皐月が言つていた通りノースリーブに短パンという服装である。肩まで伸びる長髪の手入れは適当で、「残念なイケメン」という烙印ふくいんは相変わらず押されたままのようだ。

「というか、どうして壊れたんだ？ 第一に避雷針が折れるつてのがありえないだろ」

和成の言葉に颯がすつと真面目な顔を作る。

「実はだな、一ヶ月前に異形の襲来があつたんだよ。何とか俺が撃退したが、まあそのときに折れちまつたわけだ」

異形というのは平たく言うと幽霊や妖怪だ。一般的に定義されているような「足がなくて白っぽい幽霊」や「鬼」「河童」のような分かりやすいものではない。日鬼村で定義されている「異形」というのはもつとも曖昧で中途半端な存在であり、その大半は人畜無害なものだった。

しかし理由は分からぬものの、ときたま村に攻撃をしかけてくる「異形」がいるため、有事の際は退治しに行くのが村民の仕事だつた。

もつとも、ターミネーターも真つ青なタフネスを誇る村民たちに

とつては少し大きいハエを叩くようなものであるのだが。

「何だつて……大丈夫だつたのか？」

「ああ。俺の新技の」

「颯さんが授業中に折つてしまいまして」

少女の声が颯の言葉を遮つた。

颯よりも頭二つほど背の低い少女が、エプロンに三角巾という格好で颯の後ろに立つていた。

少女の名は綾織紗紀あやおりさきといい、和成、皐月、颯と一緒に四人グループで行動していた内の一人だつた。三人より一歳年下で、今期から高校生である。純和風な顔立ちをしていて肌は白くみずみずしく、たたずまいは落ち着き払つて凛としているが、仕草や表情の端々（はしばし）に年相応の幼さも同居させている。

「おーい！ バラさないでサキちゅあん！」

紗紀の告白を聞いて颯が気持ちの悪い声をあげた。

「何だよ。お前か」

「そんな白い目すんなって！ どうせお前だと思つてたよへへへみたいな顔してんなよ！」

「そいつが体育でサッカーやつたときにへし折つたのよ。能力使うなつて言われてたのにバンバン使うんだもん。危ないつたらしうがない」

いつのまにか紗紀の隣に現れた皐月が目を細める。冷たい視線は颯に向かられていた。

「皐月まで！ クソッ、ショウガ一年分で買収したのに裏切りやがつたな！」

「あんたを脅すネタなら腐るほどあるから大丈夫」

「ですよねえええ！ いやでもよカズ。おかげでクソ田舎だなテッド・ショットが完成したんだぜ」

颯はそう言つてボールを蹴るような素振りを見せる。皐月に村内最弱の攻撃力と言われて以来、颯は常に新技の考案に余念がなかつた。まともな成功例は未だないが、どうやら今も続けているらしい。

「そのボールがないと使えなさそつた技に意味があるのか。周りを見てみる。春キャベツしかないぞ」

「なら春限定・春キャベツ・クラッシュ・ショットを

「仕事しろ馬鹿コンビ」

それだけ言い残して臯用がその場から離れていく。

和成は不服と絶望を織り交ぜたような表情をして嘆いた。

「……なぜ俺まで含まれるんだ。凄く理不尽だ。不条理過ぎる」

「馬鹿コンビっていうのは馬肉と鹿肉のコンビーフ的な紗紀が小さなピコハンマーで颶の頭を叩いた。どこから取り出したのかは分からないが、暴走する颶にツツコミを入れる際のアイテムとしていつも持ち歩いていた。村の駄菓子屋にも数年前から「紗紀ちゃんハンマー」という名前でピコハンが売っている。小は百三十円、大は一百六十円だ。

「仕事をしましょ。もつとしつかりしてください」

「オーケー オーケー。しつかりしてるぜ、紗紀ちゃん」

両手を挙げて降参のポーズをとりながら、颶が一カリと歯を見せながら笑った。

「仕事しようぜ」

颶が懐から大きめのピコハンを取り出して和成の頭を叩く。

「やめろ」

文句を言いながらも和成は笑った。変わらない村の優しさを感じながら、気の知れた仲間達の待つ方へと歩いていった。

老婆は出された茶を一口啜つて顔をしかめた。使つてゐる茶葉は高級な玉露であるようだが、淹れる温度に問題があった。本来ならば低温で浸出させてその甘味を楽しむための玉露は、高温で淹れてしまつたがために苦味の方が際立つた代物と化していた。喉元まで達していた溜息を何とか飲み込んで、老婆はまだ茶が多く残つた白い磁器をテーブルに置いた。

何氣なく目を窓の外へと向ける。

地上三十階の高層ビルから見渡す世界はひたすら広漠としたてい。しかし、老婆の目に映る世界は本質的に矮小なものであった。車や人が忙しそうに走り回り、所狭しと建築物が立ち並んでいる。その光景のを見る限り、ゆとりや安らぎといったキャッチコピーはどこかに置いてしまつてゐるようだ。

自然との共存を謳い文句にして発展を遂げたこのニュータウンだつたが、目立つものといえば人為的に植えた木と芝生ぐらいのものである。それが老婆の息苦しさを倍化させていた。

「どうしてもあの場所でなくてはいけませんか」

老婆は静かに、それでいてしつかりとした口調で話しかける。あてがわれた上質のソファーの座り心地が悪いらしく、彼女は尻を少し浮かして座る位置を変えた。

老婆と対面するようにソファーに腰掛けているのは上質なスーツに身を包んだ中年の男である。

大谷友信。建設族とのコネを使って県知事にのし上がつた人物であり、日鬼川のダム計画推進派で名の通つてゐる建設族議員だつた。

時代錯誤な丸眼鏡を押し上げながら、口を開く嫌な音を残して喋

り始める。

「ええ。五年前の洪水で流域にある住宅がどれだけの被害を受けたかは貴方もご存知のはずです。」この流域には千以上の世帯があります。ですから、その源流である口鬼村に作らせていただきたいのです」

もう十回は聞いた言葉が伝えられ、老婆は顔の皺を増やす。日本国政府も、この県も、全く聞く耳をもっていない。はなから分かりきっていたことではあるものの、落胆の色は隠せなかつた。

「道路を作り山を切り開いた結果です。本来なら山が持つていた洪水を止める力を奪つたからそうなつたのです」

「ええ。しかしどうしようもない。いまさら道路を埋め立てるわけにはいかんでしょう」

男は渋面を作るが、一瞬浮かべた嘲りにも似た表情を老婆は見逃さない。

今すぐに立ち去りたい気持ちを抑えて、老婆は苦々しげに口を開いた。

「私たちは一切賛成しません。署名も一覧になつたでしょう？ 村のほぼ全員が反対しているのです」

「このままでは政府の人間は勝手に始めることでしょう。そうなる前に、少しでも補償額を引き上げてはいかがですか」

また金の話かと思い、老婆は年甲斐もなく苛立ちを募らせる。

「お金の問題ではありません。一族代々守り続けてきた土地です。誰になんと言われようとも、血の土地を引き払うなんてことはできません」

「……そうですか」

男は残念そうに呟いて、わざとじりじりゅうじりと立ち上がつた。

そもそもこの会談に意味が無いことは男も分かっているのだろう。ここにくるまですつと、両者の意見は平行線だつたのだから。

ならば、男が欲しているのは「話し合いを重ねた」という既成事実だけだ。わざわざ村の方まで来て、一軒一軒回るような真似すら

していない。いざとなれば公権力を振りかざして周辺住民の土地を奪うつもりなのだろう。

老若男女を問わず、日鬼村の中でダム建設に賛成しているものは老婆が知る限り一人もない。過疎に歯止めをかけられるというのが県の口説き文句ではあったが、実際のところ日鬼村は過疎の傾向にあるわけではなかった。能力を持つ人間が能力者として暮らしある環境が整っているため、外部に出て行こうと思う人間がほとんどないのだ。

そうした背景を踏まえて考えると、やはり老婆もその環境を壊したくはなかつた。村の若者は全員が孫のようなもので、彼らが暮らす環境を脅かすダム建設に対して、いざとなれば能力を用いて実力行使しようとする考へたほどだ。

「今日はここまでにしましよう。また何かあつたらご連絡いたしま

す」

「……ええ」

静かに返事をしながら立ち上ると、男が開けたドアから廊下へ出た。

空調が効いているため廊下すら室内と同じ温度だった。呼吸をするだけで肺が腐りそうな生温い空気が廊下を満たしている。老婆は不快そうな表情で、足元の赤絨毯に目を落とす。

エレベーターを待つ男を尻目に、老婆は階段の方へと歩いて行く。衰えた体に三十階分の階段というのは辛かつたが、体は長年の農作業で鍛え上げられているために非現実的というほどのことではない。

「……祟りが起こりますよ」

誰に言うでもなく老婆は一人呟いて、しつかりとした足取りで階段を下つていった。

「おっし、これもいい感じだろ。カズ！ 次頼むわ！」

「はいよ」

木材を加工していた颯が声をあげる。和成は手に抱えていた太いケヤキの幹を作業台に乗せ、代わりに颯が加工し終わった木材を引き抜いた。

「相変わらずすうげえな」

和成は思わず木材の表面を撫でてみる。荒れた木肌を晒していたケヤキは美しい木目の角柱に変わっていた。

颯の使っているのは「漢術」という名称の術らしい。派手さこそないものの、触覚の感度を上げて材木の歪みを認知したり、風の流れを操作して木粉を吹き飛ばしたり、重力を局所的に変化させてそれをまとめたり、DJジャンルは多岐に渡っている。

何より凄まじいのはその馬鹿げた精度だつた。、

日鬼村の大工の中には凄腕の職人が少なくないが、そういうた職人が鉋<sup>カツナ</sup>で削ると大差ないレベルで木の表面を削り取っていく。

「重！」

漢字一文字で発動という手軽さもあり、颯の動作はリズミカルで軽快だつた。

和成はちらりと自分の加工した木材の方に目をやる。颯の二十倍以上の時間をかけたというのに比較にならないほど荒い仕上がりだつた。

少し悲しくなつて和成は目を違う方向に向ける。

「かんせーい！ そつちはどう！」

おかっぱの小柄な少女が十本もの材木を抱えてトラックの方へと運んでいった。

「オッケー！ 最後一本！ 上を失礼！」

彼女とペアになつて作業をしていた少年が宙を舞う。彼は天狗の家柄ということだが、どうして羽もないのに空を飛べるのかは和成にも分からなかつた。村内の同族ですらこれなのだから、村の外の人間が見たら腰を抜かすだろう。

「あらかた終わつたか」

和成は咳く。全校生徒が集合して作業に取り組んだために、トラック一山の木材も残すところ数本となつていた。とりあえず木材の加工はこのぐらいでいいだろうと見切りをつける。組み立ては明日ということなので、今日の仕事はこれまでだ。

「おわつたぜい！」

颯が綺麗に仕上げたケヤキの角材をスライドさせる。和成はそれを小枝でも持ち上げるかのように軽々と肩に担ぎ、近くの材木置き場に立てかけた。

「紗紀と皐月は……ってかアイツらいねえじゃん！ 逃げやがったなアンチクシヨウ！ いて！」

騒ぎ始めた颯の頭がピコハンで叩かれる。

颯の背後にザルを持った皐月と紗紀が立っていた。ザルの上には形の揃つたおにぎりが幾つも並んでいる。

「昼ごはんにしよう」

「ああ、そうじやん！ 女子が昼飯作ってくれるつつってたな！」

忘れてた、と大声で叫びながら颯が満面の笑みを浮かべた。

「颯さんは本当に物忘れが激しいですね。一度CTで検査をお勧めします」

「ひでえ……とうー」

颯がざるの手前のおにぎりを掴んで口に放り込む。

「手を洗え！」

「そうだった！ って辛つ！ 辛い！」

もんどうつて地面に倒れこみ、そのまま横回転して校庭を滑つていく愚か者が一人。呆然とその様を見ていた和成に、紗紀からの声がかかつた。

「颯さんなら迷わず先頭の一個を取ると思つたので」

和成の知る中で、この手の陰湿なブラックジョークを仕掛けてくる女子は一人しかいない。

「相変わらず真っ黒な腹してるね

「……和成さんも辛いのが好きですか？」

紗紀の微笑はそのままだが纏うオーラの色が変わる。和成にスピリチュアルなセンスはないが、第六感が鳴らす警鐘でそれを捉えた。

「ご冗談を、女神様」

村の女性陣は都会のそれに比べて芯の強さがある。幼いころから肉体労働を含む家業を手伝っている者がほとんどで力があることも理由の一つだが、なおかつ都会人とは結集力が違う。狭い村の中で育つたため、年齢や性格の差でグループが分断されることがほとんどなかつた。その結果、「女子」という強力なまとまりが出来あがつてゐる。

「つてか配らなくていいのか？」

復活を遂げた颯が真顔で尋ねる。回転もウケ狙いだつたのかと思つたが、真つ赤な目から涙が溢れていることを見ると、おにぎりは実際にかなり辛かつたのだろう。しかもしつかりとそのおにぎりを食べきついていた。驚嘆すべき打たれ強さである。

「これは私たちの分だから。どうする、丘に行く？」

「行くいくー！」

颯が小学生よろしく元気に返事をする。

「じゃ、移動……はい」

「え？ ああ、はいはい」

和成は皋月から手渡されたざるを両手でしつかり抱え、先行する颯の背を追つて丘の方へと歩いていった。丘までは道らしい道がなく、適当に草を抜いてほんの少し手をいれただけの急坂が続いていくだけである。転げ落ちないように気をつけながら 転げ落ちてもおにぎりだけは守るといつ気持ちで、しっかりと前へ進んでいく。

三分ほど歩いたところで「山吹の丘」と呼ばれている場所が見えてきた。もう一分ほど行くと田鬼川があるために、歩いていると小川のせせらぎが聞こえてきた。

「到着！」

背の高い山吹に囲まれた丘の中央には小さな祠が鎮座していた。祠の周囲は定期的に手入れをされているため山吹が生えておらず、ちょっとした秘密基地のような空間になっていた。

丘の中央に位置する巨大なカツラの木の上には、小さな小屋が取り付けられている。小学生のころに和成たちが秘密基地として作ったツリーハウスである。

丘には春の香りが満ち溢れていた。聞こえてくるものは風と水の音ぐらいのもので、和成は神聖さのようなものすら感じていた。

「……変わって無いな、ここのは」

思わず口に出す。村の端に位置するため利便性が高いことは言えない山吹の丘だったが、ことあるごとに仲間と集まつては遊んでいたことを覚えている。

「郷愁に浸るのも悪くはないが、とりあえずメシ食いながらにしようぜ。メシを食いながらよ」

「一回も言わなくつたってそのつもりだよ」

あぐらを組んで地面に座つた和成は、足の上にざるを乗せた。おにぎりを守りきつた自分を心の中で少しだけ褒める。

隣で紗紀が寸胴すんとうの水筒のようなものを取り出した。口を開けるや否や、あたりに濃厚な香りが立ち込める。

「お？ 汁物まであるの？ この香りは豚汁？ ねえ豚汁？」

「豚汁だよ」

反応するのも面倒だといった調子で臥月が颯をやりすゞした。

「いえーい！」

颯が誰もいないほうへ向けてピースサインを送る。山吹の丘もうだが、彼の行動の九割五分が非生産的なのも変わっていないなと思いつながら、和成は苦笑する。

「そんなのどこで買つたんだ？」

「通販」

「……そりやかわいそうに」

日鬼村に荷物を届けに来るドライバーは、初めての場合はまず間

違ひなく道に迷っていた。辺境の村まで一律の送料とこゝのはなかなか大変な話である。

紗紀が風呂敷につつまれたお椀を取り出して、豚汁を一杯ずつよそってくれた。豚、ゴボウ、ニンジン、ダイコン　いずれも村で取れたものだ。もちろんどの家も完全な無農薬でやっている。村内なら能力をおおっぴらに使っても問題がないため、能力を使うことで農作業も簡単に行えていた。

手渡された豚汁を一口飲んで、

「……うまい」

香り高い野菜は取り立てであることは間違いない。無農薬、日本産、取り立ての野菜とこゝのは、都会においてはまず味わう事ができないものだ。

そしてもちろん作り手がいいとこゝにもある。毎月にせよ紗紀にせよ、幼い頃から父母の手伝いで料理をしているため、腕前はお墨付きだった。

「ありがとうございます」

頭を下げる紗紀を見て和成は笑う。毒氣の無いときは年相応の幼さを感じさせる。笑つた理由が分からぬよつて、彼女はきょとんとした顔で和成の方を見返していた。

「ハヤちゃんは何かコメントはないの？」

「えー、何すか？」

颯は手についた米粒を舐め取るよつとして食べていた。隣の紗紀が顔を引いた。ジト目でにらみ付ける二者を見渡したあと、得心したように頷く。

「男はワイルド！」

「お前はもう少しマイルドになれ」

「ハッハ。それは無理ですぜ」

颯はそつこつて、麦茶でも飲み干すかのよつに豚汁をじっくりと飲んでいく。

「あつちゅー！」

飲み干して叫ぶ。喉元を過ぎた熱さを感じるあたりが颯らしかつた。

「みんな変わらないな」

「ほつ……変わらないと申すか。ならばよりヴァリエーションが増えた俺の術を見せてやるつー！」

そういうて颯が親指を立てる。

「サキちゃん、スタンダップ」

沙希がきょとんとした表情で立ち上がり、颯が叫ぶ。

「風！」

風が舞う。スカートがひらりとまつて

紗紀の白い下着があらわになつた。

「きやあ！」

紗紀が顔を赤らめてスカートを抑える。

「とまあこいついう具合ぐへつー！」

「何するんですか！ 何するんですかー！」

紗紀がピコハンでボコボコと颯の頭を叩く。

「くつだらねえ……」

「くだらなくない！ 紗紀ちゃんのパンツー！」

颯が顔面を強打される。目を狙わないあたりさちんと狙いをつけているようである。

「……まあ要するに変わらないのよ」

「みたいだな」

肩を竦める皐月の言葉が全てだらつと思つ。和成は笑いながら一個田のおにぎりにかじついた。

しばらべー一人のやりとりを眺めていると、隣の皐月が一点を凝視したまま田を動かさなくなる。

「どうした？」

問いかけながら和成も皐月が田をやつしているまに田をやつた。さやかに田をやつた。

左手側の山吹が折り倒された場所に、紅白ストライプの杭が刺さっていた。見たことのない謎の物体を食い入るように見つめている

と、皐月が口を開いた。

「ダム建設ね。当初の予定より広くなりそうなの」

「ダムって前々から言つてたやつだよな」

和成はダム建設の話を思い出す。県が洪水被害防止という名目を掲げて、日鬼川に大規模なダムの建造計画を打ち出したのはかれこれ三年ほど前になる。村民たちが中心となって何度も反対活動を開していたが、どうやらここ最近になつて実行される気配が出てきたらしいとは聞いていた。

「下流の方なんだろ？」

「この丘もなくなるらしいわ。案は議会を通つたし……署名活動なんて結局、人数よね。分母は村の人数じゃなくて、県民の人数だって話なのかな」

「……聞いて無いぞ？」

思わず低く暗い声を出してしまつた和成に、騒いでいた颯と紗紀が動きを止める。

にわかには信じられなかつた。

和成は建設地はもつと下流のあたりだと思つていた。加えてここ数年の反対運動が苛烈さを増していただため、どうせ向こうも諦めるだろうとたかをくくつていた部分もある。

「議会のメンバーは建設族の色が強いからね。ちょっと今までゼネコン側と入札でゴタついてたみたいだけど、もうそれも終わつたし。現にいつのまにかショベルカーとダンプカーが入つて作業中。たぶん今の県知事、あいつらに建設の話を持ちかけてたんだしょ。日鬼村のダムもその中に含まれてるはず」

「……嘘だろ？」

和成は思わず無意味な言葉を返してしまつた。皐月がこんな悪質な冗談をいう人間じやないことは分かつていても、そう聞き返さずにはいられなかつた。皐月の横顔に向けていた視線を川の方へと移す。木に遮られていてここからでは良く見えないが、恐らく彼女の言うとおり建設準備が進められているのだろう。

慣れ親しんだ丘が消える。

その事実に対しても成が抱いた感情は、言葉で言い表せないほど判然としないものだつた。

強烈な喪失感に襲われながら、呼吸がやや乱れているのに気づく。議会への怒りもあれば、失うことへの悲しみもある。全てを総称するのなら、「漠然とした恐怖」だろう。

「ごめん。タイミングが悪かったかな。もっと早く伝えても良かつたんだけど、向こうでの暮らしに影響が出るかと思つて」

「いや……」

仮に伝えられたとして何が出来たというのだろうか。いや、自分は何をするべきだったのだろうか。

反対運動にはかなりの精力を注いできたはずだつた。署名活動も積極的に展開していく、やれることは全てやつたつもりでいた。渦を巻く自責の念を感じながら、和成は自分が非力な一介の高校生に過ぎないことを思い知らされていた。

「オイオイ、そんな俯かないでくれよ。俺たちだつてやれることはやつたじゃねえか」

「それは分かつてゐる。誰を責めるとかそういう話じゃなくて、やっぱり衝撃的でや」

和成がそう発言してからしばらく誰も何も言わなかつた。どう声をかけるべきか考えあぐねていたらしく、颯がわざとらしく手を叩く。

「なあサツツー。もう俺たち仕事無いんだろ?」

「うん。後は明日。明日は本職の人たちがやつてくれるから、私たちの仕事はここで終わりね」

皋月の言葉を聞いて颯がニヤリと笑う。

「じゃあ山菜でも摘んでくるわ。こいつの家、食い物もねえだろ? どうせ日曜日だしコイツの家でメシ食うだろ? コイツの家に食料を持っていくわな。実際一人が作ってくれるからその間はヒマ。となると俺たちがやるべきは山菜取り。どうよ紗紀ちゃん、合理的な説明じやね?」

「長くて分かりにくいです。六十点」「四十点ラインで反復横飛びしてゐ俺にとつちや、六十点なら上等だ！」

力強くグーサインを作つて颶が立ち上がる。和成も立ち上がりつて尻についた土を払い、空になつたざるを皐月に手渡した。

「じゃあ私たちは食料運びと下ごらえか。料理する時間が短くなると嫌だから早めにとつてきてね」

「おーっし、行くぞ和成」

自分のことを思つて話題を切り替えてくれたのは明らかだつたが、和成は友人たちの優しさが嬉しかつた。これ以上山吹の丘についていろいろと考えていても、打開策が出そうにない。ならばまずは落ち着いて、ゆっくり考えられる状態へ持つていくことが第一だらう。

「分かった

和成は頬を軽く叩くと、思考を山菜取りの方へ切り替えた。

### 三・山菜ハンター

村の西方の山と山の間に、谷状の地形が広がっている場所がある。谷と言つても非常になだらかで、斜面は草木に覆われていた。村に伝わる史書をひいてみると、この谷には大昔は川が流れいたらしい。

また、大量の山菜が取れることでも有名だった。日鬼村の寂れた立地条件のおかげで、観光客や業者の乱獲という憂き目に会うことなく今日まで生き残つてきている。栄養価だけでなく味も良い山菜は、村民たちの食卓には欠かせない存在だった。

「よーし、それでは採集開始と行きますか！」

そう意気込んだ颯は、背中に大きなリュックサックをしょつていた。和成も同じような装備をしている。

「旅行にいつちや山草やら種やらを大量に取つてきて撒いたよな」「急にどうしたんだよカズ。中三の時にはやつてたからたかだか一年前の話じやねえか」

「懐古に浸つたつていいだろ?」

「いいけどおっさんくせえだ」

「自覚はある」

二人は旅先やホームセンター、果ては街中でも、気になつた植物があれば買うなり分けてもらつなりして持つてきていた。

お陰で村内では日本どころか世界中の植物を見ることが出来る。また、植物の生態系を破壊しないように気をつけながら、荒れた区画を耕して新しい植物 主に食べられるもの、を植えてきている。その甲斐あつて、ちょっと歩けばリュックサック一杯の山菜なり果物なりを採集することが可能だった。

「ノビルだノビル。幸先がいいぜえ」

颯が嬉しそうにノビルを集める。日本全国で採取が可能なノビルだが、この山のものは別格だ。他の場所では小指の先ほどの球根しかつかないが、この谷ではピンポン玉ほどのサイズのものが幾らでも出る。ネギ・ニラ・ニンニクの中間のような味がするノビルは、日鬼村の家庭料理では定番の食材である。

和成も真剣な表情で辺りを見渡す。標的は動かぬ草とはいえ、和成の射抜くような眼光は獵師のそれだ。

「ツクシだ」

ターゲットを捉えた事をやたらと低い声で颯に報告する。そんなに格好つけんでも、と笑う颯に親指を立てながら、和成はぶちぶちと三十本ほどのツクシを抜き取つていく。

「

目の前の木の姿は見覚えのあるものだつた。タラノキと呼ばれるそれは、芽の部分を天ぷらにして食べると非常に美味しいのである。酒のつまみとしてスーパー や総菜屋に行けば、日鬼村でなくとも売つていいだらう。

視線を上に移せばちょうど食べ頃のタラノメがあつた。幹のよくな太い部分から細かく枝分かれした若葉が伸びている様は、どことなく皐月の触手に似ている。和成は満足気な笑みを浮かべながらタラノメを摘み、リュックサックに入れてあつたタッパーに小分けして詰めていった。

「これ何だっけ？ 食えるやつだったのは覚えてるんだけどさー。」

颯が不安定な体勢で斜面に立ちながら右手に掴んだ草を掲げていた。

和成は暫くの間目を凝らしてそれを見つめていた。細い葉はキク科に特有の形をしており、ノギクの一種であることを想像させた。記憶からサルベージした草の名を告げる。

「……ヨメナだったかな。うん、そう、ヨメナだ。ビタミンAが普

通の野菜の十倍とか書いてあつたな」

「そう、ヨメナだヨメナ。夕食におわツ！」

叫び声を残して颯が転倒する。なんとか受身を取つたらしく、斜面から滑り落ちることだけは回避したようだった。

「大丈夫か」

「いてえ。最近会話の途中で遮られるパターンがだら……ツルがひかつかつた……ツルじゃねえな。なんだこりや、「ミミか？」和成が目を向けた先で、颯の爪先が格子状の柵よつなものに突き刺さっていた。

「誰だこんなところに「ミミ」を捨てたやつは！ 許せん！」

「村のヤツじゃないと思つんだけどな」

文句を言ひながら颯が「ミミらしき鉄屑に手をかけて引くもの、土に深く埋まつているのか微動だにしない。和成も近づいていつて一緒になつてその格子状の物を引いた。やはり土中深くにうずもれでいるらしく、曲がるだけで外れそうな気配はない。

「埋まつてんのかこれ」

二人がかりでスコップを使って土を払つていく。鉄柵は思つたより大きいらしく、三十センチ四方ほどが露出してもまだ取り外せる気配はない。

「颯」

「おうともよ

一人で顔を見合わせてから、スコップを動かすスピードを上げる。一メートル四方ほどの土を払つたときに、ようやく鉄柵の右端に打ち込まれた杭を発見した。どうやら柵の中は空洞になつていて、斜面にできた穴を塞ぐために設けられたものらしい。

「なんじゃこりや？ なんかヤバい化け物でも封印してんのか？」

颯は突つ込みを入れてはいるものの、目を輝かせながら楽しそうに掘り進めて行く。それとは対照的に、見守る和成の表情は不安げだった。

「まさかとは思うが中に入るつもりじゃないだろ？ な」

「穴があつたら入りたい入れたい年頃だろ」

振り向いた颯はウインクをしながら和成にそう伝える。

「……やめとけ。絶対に危ないぞ」

「高校一年生だろ？ デンジャラスな冒険デンジャラスがしてみたい年頃だろ？」  
「崩落の危険性があるだろ。そうなつたら危険デンジャラスじゃなくて致命ファイタルなことになるぞ」

「頼むよ和成！ 僕ら一人なら崩落してもなんとかなるだろ！」

もし地盤が沈下したら数トン単位ではすまない土が降つてくることになる。そうなれば力を使つても何とかできるかどうかは怪しかつた。しかし和成自身にも好奇心があることは確かで、現に謎の洞窟を前にして中に入つてみたい衝動に駆られているというのが事実だった。

「……分かった。じゃあどんな状態でも一十分だけだ。山菜を早く持ち帰りたいしな」

「オーケー。それでいい。まあどうせ中も封鎖されてて大して進めないだろ」

二メートル四方ほど鉄柵を剥ぎ取つた颯が意気揚々と中へ入つていく。和成も浮かない表情ながらその後に続いた。

しかし三メートルも進んだところで前に進めなくなる。道が詰まつているのではなく、光が届かないために前が見えないのだ。

「よし行け必殺和成ファイヤー」

「窒息死したいっていうならやつてやるけど」

和成の言葉に颯ははつとなる。理系に強い和成とは対照的に颯は文系だった（性格にはそのどちらも苦手であったが）。自然科学系の能力を使う割にはいろいろと抜けている部分が多い。

「爛ラク」

颯の声で発光体が浮かび上がつた。大きさは拳大ほどで、白っぽい光を放つ様はデスクライトに良く似ていてる。

「……どういう原理で光つてるんだ？」

「原理を超えるのが術師なのぞ」

和成はそれ以上の追求を控えた。異形や異能力者相手に科学理論を説くのが間違っていることは理解しているが、こと颯の場合はそ

れが酷かつた。術の原理はどれも科学的には説明できないものばかりで、一見するとエネルギー保存の法則すら無視しているようだつた。和成は炎を出現させる際に周りのものから熱エネルギーを奪う必要があるのだが、颯にはそれがないらしい。光エネルギーをどこから抽出しているのか、和成には皆見当が付かなかつた。

颯が出現させた光球を頼りに進んでいく。洞窟はそれなりに広くしっかりとした作りであり、今すぐに崩壊するといつことほなさそうだつた。

「金塊とか落ちてねえのかな」

光球の数を増やした颯が足元を探るように明かりで照らす。すっかり宝探し気分らしく、聲音からも興奮していることが伝わつてきた。

「……あつたとしても石炭だろくな」

「夢がねえな。ああ、じゃあ白骨とかはビデウだ。インディ・ジョーンズ気分でよ」

「そいつは遠慮したい」

「そうだよー」

和成の声を遮るようにして颯が声をあげる。

「どうした」

「こー、坑道じやねえ？ なんかほら、大昔に金山を掘つた跡地をさあ、明治時代か何かに物資の輸送路に使つてたつて話がなかつたつけ……つてことは」

金がまだあるかもしれない。雄弁にそれを語る颯の目を見て、和成は肩を竦めた。

「金が出ないから閉山なんだろ。俺の記憶が正しければ日鬼坑道は崩落する危険性があるから閉鎖したつていう風に続いたと思うんだけど」

颯が目を泳がせる。

「オラちょっと怖くなつてきだぞ。さつさと終わらせましょ」

「戻るつていう選択肢もあるぞ」

「男は当たつて砕けるぐらいが格好いいんだよ！」

颯はヤケクソ氣味に叫んで歩幅を広めた。和成ももうどりにでもなれと投げやりになりながらその背を追つ。

坑道はほぼ一本道だった。分岐する場所があると迷つて危険だと思つていたが、どうやら杞憂だつたらしい。

十五分も歩いたところで大きく開けた場所に出る。道はまだ奥にも続いているようではあるが、それ以上に気になるのはその場所に捨てられた紙だつた。大きな山を形成するほど積み上げられた紙屑の上から一筋の光が漏れている。どうやらここは地上と繋がつているらしい。

「…………」上と繋がつてゐるらしいよな

「一メートルほど上で光の差しているのを確認して、颯が和成に尋ねる。

「まあ光が漏れてるしそうなんだろうな

「よし、あがつてみるか

「そうだな。戻るより楽そうだ」

一人で紙やゴミの山をじけていく。壊れたちりとりや簞、木製の机や椅子など、わけのわからないものが大量に廃棄されていた。どうやら学校用具らしいそれらがなぜ捨てられているのか疑問に思いながら、ゴミを放り投げるようにして道を切り開いていった。

「つーかこの上何処に繋がつてゐるんだろうな？ 移動してきた場所を考えると……どこだ？」

「まあ行つてみればいいだろ？ 肩を貸してくれ」

「あいよ」

颯に肩車をしてもらい頭上の穴に手を伸ばす。ギリギリのところで手が届いた。力をかけてみるものの、かなり重いものが上に乗つているらしいくびくともしない。

「なあ、民家だつたりしないか

「もしそうだつたら謝罪すればいいぞ」

さも当然のように颯がそう述べる。謝る事態に直結するような行

動は避けるべきというのが和成の信条ではあるものの、友人の強引な意見を押し通してみる事にした。

「踏ん張れ颯。 ぶち抜くぞ」

「オーケー」

力を込めて床板を破り、壊した板のフチに手をかけて頭から上へ上つた。

「え？」

「はい」

聞きなれた女子の声が耳に響く。

穴から顔を出す形で見回した部屋の中に、下着姿の女子 恐らく着替え中の少女が、若干一两名ほどいた。

幼馴染ながら中々いい体つきである。皐月は出るところと引っ込むところがしつかりしている。モデル体型とまではいかないだろうが、和成はこのぐらいの体つきが好きだった。紗紀はこれからいつたところだろうが、やはり肌は

「ごめんなさい」

謝罪をして頭を引っ込めようとしたが、次の瞬間に腕が握られた。

「ちょっといいかなカズ君」

皐月が和成の右腕を全力で掴んで引き上げる。強烈な力が上方向にかかり、気づけば足首を握っていた颯ともども女子更衣室の中に投げ飛ばされていた。

## 四・鬼の実力

「…………馬鹿でしょ」

「愚か過ぎます」

更衣室から投げ出された和成と颯は、険しい表情をした幼なじみ二人に命じられて、校庭で正座させられていた。

まさか高校の女子更衣室に繋がっているとは夢にも思つていなかつたようで、男二人の顔には動搖の色が強かつた。

「トイレじゃなくて良かつたよな」

「むしろトイレの方が」

「オイ、反省してんのか」

皐月の声で二人は押し黙る。

この間の落雷で穴が開き、いらないゴミをつめこんで適当に補修しておいたところから和成たちが出てきたらしい。皐月いわく、日鬼農業高校の女子更衣室は坑道を掘り進む際の資材置き場として使われていた建物の上に作られたため、地下坑道と繋がっているとのことだった。

「どういうかあなた方はどうしてこんなタイミングでお着替えをなさつていたのでしょうか」

颯が奇妙な敬語で問いかけた。

「いろいろと片付けがあつたのよ。明日仕事をしやすいように場を整えたりね。丁度着替えて家に向かうところだったの」

「…………さいですか」

「山菜取りがどうして地下探検になつてるんですかあー！」

紗紀がピコハンを振り回しながら頬を膨らませる。

「いやね、入り口を見たらインディ・ジョーンズのテーマが流れてきてよ。いや入ろうつて言ったのは俺じゃなくてカズなんだけどさ

「オイコラ責任転嫁はやめろよ」

和成は颯の方を睨みつけて苦情を述べる。

「お前はそれなりに見れたからいいだろ？が。俺は投げ飛ばされた一瞬しかみえてなオウフ」

小声で話し合っていた颯と和成の額に容赦なくピコハンが振り下ろされる。

「山菜も取つてきた！ 取つてきたから！」

颯は俺に任せろといった感じのアイコンタクトを和成に送つてから、ハンドバッグをガサゴソと漁り始めた。どうやら収穫物を見せるつもりらしい。

「ほら！ 一リンソウ！」

和成はその手に握られた草を見てその表情を歪ませた。颯が山菜取りをする人間にあるまじき致命的なミスを犯していたからだ。

「それ、トリカブト」

流石は百田鬼家の料理長である皐月である。一発で見抜いた慧眼を褒めながら、わざとどの下着姿を思い返していた。

「へ？」

颯は自らが持つていた草を見る。

「一リンソウじゃなくて？」

「似てるつちや似てるけど……あんた何年山菜取りやつてるの。明日の新聞に載るところだつたわ。高校生四人死亡って」

「…………すいません。いやあ、おれも頑張ったんだけど……」

颯の声が尻すぼみに小さくなつていく。

和成もなれない正座に足が悲鳴を上げていた。足を崩そうとした瞬間に、後ろから紗紀のピコハンが肩に振り下ろされる。まるで座禅のようだった。

「はあ」

皐月が軽蔑と呆れをたっぷりとこめた溜息をついた。

「…………もういいから、とりあえず体洗つて山菜の下準備でもしててういっす」

「はい」

立ち上がろうとした瞬間、紗紀が急に体を翻す。村の西側 和成の家がある方向の空を見上げていた。

和成も異常な気配を感じ取って身を硬くする。颯と皐月の反応も動搖だつた。

異形である。

それも年に一度二度ほどしか現れない強大な存在感を放つていた。和成は思わず息を呑む。

和成が生まれてから異形絡みの事件において人が死んだ事はなかった。あつてもせいぜいかすり傷を負つた程度の話しかないものの、かつては死傷者が出る事もあつたとのことだつた。村の歴史書の中には、強大な異形との戦いの果てに命を落とした者の記録も掲載されている。

「距離は七千メートル前後かと。西方です」

「七キロ……村の中か！」

颯の叫び声が終わるより早く皐月が動きだしていた。走つていった先はホーネットが止めてある方向だ。

「颯、紗紀。待つてくれ。俺たちで終わらせてくる」

和成はリュックサックを颯に投げ渡した。背後から皐月のホーネットのエンジン音が聞こえてくる。

「カズ君！」

目測で距離を計算し、和成はホーネットが自分の脇を抜けていくその瞬間に後部座席に飛び乗つた。

異形反応が出る事はそう多い事ではない。

もし出たときは近場の戦える人間が動くのが基本だつたが、和成や皐月のような「鬼」が村にいるときには基本的に鬼に任される。近代兵器すら正面突破できる力を持つてゐるため、こと戦いに関しては誰よりも適してゐるからだ。

ホーネットの速度は既に百三十キロをオーバーしていた。危険ではあるが今はそれを忠告している場合ではないことを心得てゐた

め、和成は口を噤んだままだった。

肉が裂けるような音がして、皐月の右手から細く長い触手が伸びる。一瞬にして全長百メートルにも達した触手の先には玉玉があるため、皐月の視野は異常なまでに広い。もし道路上に人間がいるとしても、全力の皐月の視野をもつてすれば何とか回避することが可能だろう。

申し訳程度に点在している制限速度を示す標識など、和成にはもはや見えてはいなかつた。

「家に寄つてくれ」

「了解」

百田鬼家まであと一キロほどといつといひで和成はバイクから飛び降りた。慣性の法則を根性と氣合で打破し、時速三百キロ超のスピードで地を駆ける。

頭で大雜把に距離を計算して飛び跳ねる。百田鬼家を飛び越えてその庭に回転着地を決めて、地面に転がしておいた一本の「金碎棒」を拾い上げ、同じく庭に置きつ放しにしておいた三本のボンベを背負い込んだ。やううと思えば時速三百キロオーバーの速度で現場まで直行することも可能だつたが、消耗していることを考えて力を節約することにした。

減速したホーネットが家の前を通り過ぎよつとした瞬間、和成は重りを抱えたままホーネットに強引に着地する。後輪が悲鳴をあげてタイヤをすり減した。

「あーもう！ ホーネットのタイヤは太いから高いのに！」

叫ぶ皐月に頭を下げながら、和成は顔にマスクを装着した。百キロ以上で飛ばすホーネットの上で自分の装備を整えていく。

背中に背負つてしているのは三本の円柱だつた。一つは酸素ボンベ、一つは二酸化炭素式の消火器、その二つよりも一回り小さいものがガソリンを噴出できるボトルだ。

何より異質なのは顔面を覆うように取り付けられたマスクだった。

マスクは特殊なつくりで、ボンベを取り外せばガスマスクとしても

機能するようになつてゐる。

和成の能力を最大限に活かそうと思つたときに必要な装備だつた。二十キロ以上の重量も、鬼のスピードを奪うことはない。むしろ早すぎるスピードを制御する意味で重りを背負つてゐるのはプラスだつた。

さらに腰にホルスターを巻きつける。現代日本では手に入らない拳銃であるが、日鬼村には戦時中の銃器がそこかしこに転がつていた。日鬼村を補給所として利用しようとした兵士たちが返り討ちにあつたときに残していつたものである。

「オッケー？」

皐月の問いかけに、和成はマスク越しの不明瞭な声で返事をする。それでも皐月は理解したらしく頷いた。

皐月が更にスピードをあげた。百五十キロという爆速で華麗に力一握を曲がりきる。スピードもそうだが腕前も兄譲りで、中学にあがるまでは将来の夢はレーサーと言つてのけてきただけのことはあつた。

しばらく進んでいくと、農道の中央になにやら黒い大岩のようないが存在しているのが見えてくる。

「……和成、いくよ」

皐月がエンジンを最大まで開く。黒い岩の直前で和成はバイクから飛び降りた。百六十キロほどのスピードを活かしたまま、まず金砕棒の一撃で黒い塊の表面を抉り飛ばす。

着地の瞬間に速度を保つたまま方向だけ入れ替える。人知を超えた脚力を活かし、飛んでいると形容しても差し支えない勢いでもつて空中へと飛び上がつた。

猛烈な突風が吹き荒れて周囲の桜の花弁を散らし、花吹雪が辺りに舞う。

落下の速度に腕力を加えて、金砕棒で思い切り黒い塊を殴りつける。吹き上がつた黒い飛沫が体に降りかかつた。左手の金砕棒を地面に突き刺してスピードを殺し、着地する。

(何だ……「イツ」)

和成は顔をしかめる。何時にもまして訳のわからない敵だった。大きさは一階建ての家屋ほど。形は橢円だが、ところどころ岩のように尖っている部分もある。

叩いた感触は柔らかかったが、それも表層の部分だけで芯の部分は硬そうである。岩のようでもあり、土のようでもあり、粘体にも思える。表面は水、あるいは金属を思わせるような光沢を持つていた。

即座に和成の周囲にテニスボール大の火球が現れる。始めは二、三個だったそれが、二十や三十という数になつて周囲の空間に展開していた。

和成は迷わず背中のガソリンを黒い塊に吹きつけ、鬼火でそこに引火させる。轟々と燃え上がる黒い塊の周りに生える黒い柱を金碎棒で打ち碎していく。

さらに使わない鬼火で周囲の空気を焼いていく。酸素を奪い尽くすことで、相手が生命体であるのかどうかを判別するのが和成のやり方だった。人間ならば十六パーセントの酸素濃度を切れば活動に影響が出てくる。六パーセントならば即死の可能性すら有り得た。手馴れたように一パーセントの濃度調整をやってのけながら、土塊つちくの周辺の酸素濃度を低くしていく。

(……生命体じゃない、か)

腰につけた酸素濃度計が鳴る。十八パーセントから一パーセント下回るたびに鳴らして、今は四回目だ。十四パーセントでまともに動けているのなら生命体と考えるのは合理的でない。ならば酸素を奪う必要性はないということになる。

考えていたところに田の前の黒い塊から黒い岩石が飛び出した。和成はそれを金碎棒ではたき落とす。

生命体でなければなんなのか。和成は基本的にそこから先を考えない。理論を捨てなければ異形とは戦えないからだ。実態があるのに呼吸をしないもの。一足歩行なのに数十メートル飛び上がるもの

かくいう自分も含めて、科学理論は全て通用しないのならば、合理的思考能力とやらが出る幕は無い。

金碎棒でその肉を抉る。四メートルという普通の武器ではあり得ないリーチがあるおかげで、皐月のような伸縮自在という得物を持つ相手にある程度対応ができる。鬼火を使えば良いというのは諷の弁であるが、テニスボール程度のサイズしかない火炎球では大したダメージを与えるのが常だつた。

黒い塊が火山のような形になり　幾つもの岩らしきものを噴出した。

視界の隅で皐月の頭上に迫るそれを見た。

和成は金碎棒一本をプロペラのように回転させて空中に放り投げる。

ミキサーに果物を入れたかのように空中の岩が破片となつて砕け散る。それを眺めながら腰から拳銃を引き抜いた。旧日本軍が使っていた南部大型拳銃である。

皐月の頭上にあつた正確に狙いをつける。もちろん和成は銃を撃つた経験は少ないが、能力で腕のブレをゼロにして撃つことで全弾が黒い塊を打ち壊した。

高速回転をして落下してきた金碎棒をキャッチし、小さな破片になつた黒い物を金碎棒を振った風圧でなぎ払つ。

「ありがと！ 怪我はないよ！」

遠くから聞こえてきた皐月の声に、和成は思いを強くする。

幼馴染の少女と村を守るため。

鬼崎和成にとつて戦うに最上の理由はそこにあつた。

依然として体中から針のようなものを噴出し続ける黒い塊に向けて、三メートル超の金碎棒を左右に大きく振るう。敵本体に当てるのではなく、重量とスピードをいかして敵の肉をこそき落とすのが目的だ。

土塊の体から手のような形をしたものが伸びてきたのを確認し、和成は両手の金碎棒をバトントワリングのように高速回転させる。

和成の趣味は和太鼓とバトントワーリング、加えて棒術のために、四メートルもある不気味な得物もなんとなく扱えるようになつた。

金碎棒が風になる。凄まじい速度で回転させているのにも関わらず、その一対は決して空中でぶつかることはない。伸びてきた手がミキサーにでもかけられているかのように細切れになつて吹つ飛んでいく。

見るも無残に体を抉り飛ばされていた土塊が、突如として破裂する。半径五十センチほどの球体になり、その一つ一つがウニのよう棘を生やしながら、くるくると転がつて和成たちのほうに迫る。じつと状況を見守つていた皐月が、低速でホーネットのエンジンを回しながら動き始める。和成は皐月に金碎棒があたらないように距離を置く。

和成の目の前で皐月の右腕が膨れ上がる。

太いゴムが引き千切れるような音を立てながら、皮膚を割り裂いて幾つもの目玉がその手と腕に浮かび上がつた。

同時に腕が形を変えていく。指らしいものがなくなり、肌の色が黒ずんだものに変わり、見る見るうちに細く長く伸びていく。大樹の枝のように数千数万もの細かい触手が纖毛のようにその腕を覆う。ぬらぬらと輝くそれは皐月はグロテスクだといつていたが、和成はその輝きを好いている。綺麗な少女とは対照的に思える禍々しいフォルムは、やはり自分が鬼だからだろうか 美しいと感じている。

皐月の能力は「育てる」必要があるため和成のものと比べて発動までに時間がかかる。周囲にあるものを吸収して触手を形成する能力は和成のそれよりも強烈だ。

皐月がウニに差し入れた触手が、何かを移動させているかのように大きく膨らんだ。

何をしているのかは明白だった。目の前の土塊が「噴出」という形でつかつていた能力を、触手を通して相手の体内で行つつもりら

しかつた。

「ばいばい」

土塊が飛び散った。マニピュレーターのよう辺りに差し込んだ触手の先で、黒い化け物たちが破裂していく。

和成は金碎棒をだらりと垂れ下げるて休みながらその光景を見つめていた。

「…………」

和成は豪快な幼馴染の姿を頼もしく思うと共に、思い切りの良さを恐ろしく感じて溜息をつく。

次いで地面が割れた。

獣の咆哮とともに金色の毛をした怪物が現れる。

「おーう……九尾ときたか」

皐月がダルそうに声をあげる。和成もマスクの下で啞然としていた。

異形は地震や雷のような天災と似ていた。毎日遭遇するようなことはないが、出会うときは強烈な勢いをもって噴出してくる。今の土塊も十分強かつたが、続く妖狐も強烈そうである。

九尾の口から放たれた火炎が道を焼く。

和成は素早くボンベ三つを脇の林に放り投げると、ホーネットの車体ごと皐月の体を抱えて上空に飛び上がった。皐月の体重とあわせて一百キロ以上の重さが和成の体力を奪う。

「私……重いかな」

「……バイクが重いんだよ。冗談言つてる場合じゃないだろ」

和成は火傷をすることはなかつた。窒息だけ気をつけていれば全身火達磨になつても何の問題もないが、ボンベが破裂した際の衝撃は防げない。普段はボンベ周囲の熱エネルギーを奪つてはいるのでまづ爆発することはないが、道路の横幅めいっぱいを焼き尽くす巨大な炎を浴びれば吸収が間に合わない可能性もある。

何より皐月は和成ほど火への耐性はない。耐久力テストなんて馬鹿げたことをやつたこともないので、威力のわからない攻撃はかわ

すほかなかつた。

「面倒だな……」

「何とかなる?」

いつもなら倒せそうな相手だったが、昨夜の一戦、今朝の学校での仕事もあり、能力ではなく体力の方が限界に近づいている。

「……食べちゃおうか?」

「無理に決まつてるだろ」

伝承の鬼は人を食う。和成や皐月が実際にそれをすることは不可能だが、擬似的に「喰つ」能力は未だ残っている。肉体ではなく「精神」を喰らう能力だ。

和成や皐月の家には喰つた精神を吐き出す方法も伝わっている。精神は消化するまでが非常に面倒で、高位の靈体などはとてもではないが喰う事ができない。

一年前にとある異形を喰つたときは、頭の中に大量の呪詛らしきものが渦巻いていて思わず吐き出してしまつたほどだ。目の前の九尾などはその好例だろう。和成には、体力が有り余っているときでも消化しきれないだろうという諦念があつた。

「貴方をよ。疲れてるでしょ? 私が戦つたほうがいいと思つけど」

皐月の言葉に和成はしばらく押し黙る。

精神を食つ相手は何も異形だけとは限らない。人間をはじめとするあらゆる生命体を相手取つて「喰う」ことが可能である。それによつて生まれる利点は多く、実際和成はピンチに陥つたときに喰う喰われるという経験が何度かあつた。

「気は乗らないけど……しゃあないよな」

和成は吐き出された業火を右手の金碎棒の一振りで吹き飛ばし、そのまま大きく後方へ跳ねた。

森の中へ着地すると、抱きかかえた皐月と田を合わせる。

「いただきます」

皐月の方がどう考へてゐるのかは分からぬ。しかし和成はどうもこの瞬間は苦手だつた。和成が相手を食うときはせいぜい手で触

れる程度の動作しか必要としないが、皐月の家に伝わっている方法はそれとは少し違う。

唇に暖かいものが触れる。

記憶が確かなら「食われる」のはこれで二度目だった。性差を意識し始めた頃は、キスの方に気を取られて戦闘どころではなくつたという苦々しい記憶もある。

伝承だから仕方ない 初めて使つた口に皐月がそういうふうにいたことを思い出した。

和成の視界が暗転する。

次の瞬間には、視界には自分の顔が映っていた。

(……早く唇を離せ。自分にキスしてみたいて複雑な気分なんだよ)

「はいはい

皐月は慈しむように和成の体を森の中に寝かせると、宙へ飛び上がつた。その飛距離は九尾の身長と並ぶほどで、普段の皐月の物とはかけ離れている。

異能力をどう行使するかを伝えるのは非常に難しい上に、まともに使えるようになるまではかなりの鍛錬を必要とする。絵がうまい漫画家の元で働くアシスタントが、必ずしも師匠と同じような絵を描くことができないのに近い。

だが、精神を喰らうということはその仮定をすつ飛ばして「出力」の方法を手に入れることが出来るということだった。全ての感覚を共有することで、培つた身体的な動きをそのままトレースすることができた。

「やつ！」

皐月は空いていた左手で金碎棒を拾つて振り回す。その動きは和成そのもので、四メートルの鉄の塊を自在に操つていた。

九尾が大きく尾を振り下ろす。皐月は眼前の地面に金碎棒を突き刺してバックステップ。尾は金碎棒を突き破る形となり、九尾が甲高い悲鳴をあげる。

「……く

皐月が攻撃をためらつた。

攻撃を入れることはできるが、追撃が叶わない様子だった。既に二十メートルに達している右手の触手に比べると、左手の四メートルの金碎棒ではリーアルを合わせにくい。

(どうする?)

「うーん……」「うする」

皐月は左腕で右腕の触手を握り締める。

腹の鳴る音を大きくしたような不気味な音がして、緑色の触手が左腕に移動していく。

「この方が間合いがとりやすい気がする」

皐月は十メートルと十メートルに切り分けた触手の先に金碎棒を握りこむ。

「腕の操作は頼んだよ!」

(了解)

皐月から体の支配権を譲り受けた和成は、十メートルのリーアルを活かして九尾の顔面を殴りつけた。首をもぎ取る気持ちで攻撃を一点に集中させる。

「軽いなあ。羨ましいよ

(そう楽なモンじゃないんだよ)

振り上げられた爪を金碎棒をつかえ棒にして止める。側に持つてきていたもう一本の金碎棒を九尾の顔面に向けて放り投げた。額をぶち抜かれた九尾が悲鳴をあげる。気づけば、刺した金碎棒に右手のツタが絡まっていた。

(あとは)

「流し込む!」

皐月が左手の金碎棒で九尾の頭を刺し貫いた。一本の金碎棒に貫かれる形になつた九尾が悲鳴をあげる。

「これで

(終わりだ!)

両腕の触手と金碎棒を介して膨大な熱エネルギーを注ぎ込んだ。頭の中に直接炎を流し込まれた九尾は、陽炎のようにぐにゅぐにゅがんから背景に溶け込むようにして消えていった。

「おーい、いつまで寝てるんだ少年よ」  
テーブルの上に煮物を運んできた皐月が、居間で倒れ込んでいる和成の頬をつついた。

目を覚ました和成はあたりを見回した。自室であるということと、皐月がいるということを確認すると、そのまま倒れ込もうとして、「おーい」

倒れ込む背中を皐月が支える。そういうえば学校の補修があつたはずだと思い、目を擦りながら立ち上がる。

「…………朝か」

「夜です。夕飯だよ夕飯」

「…………朝か」

「駄目だこりや」

日本語が通じないほど寝惚けている和成を、皐月は半ば引き摺つた状態で食卓まで連れて行く。痛いからやめてくれと文句を言つてはいるものの、手を離すと和成がそこで寝そべつてしまつたため、皐月としては引きずり続けるしかなかつた。

「オウ和成。お疲れ様だったな」

「ようハヤテ、そういうやメシ食つて話だつたよな  
「起きてるなら起きなさいよ!」

「いや、皐月の声は聞き慣れてて効き目がないといつか  
「爆発する日覚まし時計でも買ってきてやろつか」

背中に小声をぶつけてくる皐月に軽く会釈をして居間を通り抜け。洗面台はないため、手を洗うときは台所を使つていて。台所の後片付けをしていた紗紀に頭を下げてしつかりと手を洗つて水を切つてから、和成は座卓の方へと戻ってきた。

後ろから紗紀が付いてきて席に着く。和成の正面に颯、右手に皐月、左手に紗紀といつも通りのポジションで食事を開始する。

「それじゃ、いただきます」

フライングスターした若干一名を除いて、和成と紗紀も挨拶をした。

和成は筑前煮の牛蒡に箸を伸ばす。

「うまい。牛蒡は皐月が剥いたな」

「そんなの分かるの？」

「紗紀はもう少し皮を剥くだろ」

「俺は？」

「お前は皮を剥き忘れるか、実がなくなるか、もしくは能力を使って芸術の域に達しているかのどちらかだな」

「信頼されてねえなあ！ 術に頼らなくたってこいつにはピーラーとこう名のすばらしいアイテムがあるんだぜ！」

そう言つて颯はピーラーを取り出した。おおかた持つてきただいが使う機会がなかつたというところだ。

能力を使えば一瞬だというのに、颯は自らの手でやることが好きだつた。精度が良すぎてやつっていても面白くないといつのが本人の弁である。

「ピーラーはピーラーで剥き残しがでるだろ。やりすぎて表面がボツコボツになるか

「つぐ……」

颯は悔しそうな、それでいてどこか悲しそうな表情をして座布団に座る。颯の母親は栄養士の資格を持つていて、学生時代は中華料理店でアルバイトをしていたらしい。料理を一拳に引き受けた母親の元で育つたために、ほとんど作ることなく育つてきたのであつた。都會に居た頃には、なんとなく中国産であることが気になつて牛蒡は皮をむいてしまつていたが、この牛蒡は皮むきを最小限に抑えてある。牛蒡の旨味成分が表皮にあることを調理者がよく理解していることが伺えた。

「うまいな……牛蒡」

「牛蒡が好きっていうのも珍しいわよね。皿の豚汁もやたら牛蒡探してたし。牛蒡系男子?」

「……いや、うまいだろ。日本人しか喰わないっていうのを聞いてありえないなと思ったよ」

「え? マジで?」

口に物を入れながら颯が和成の方に目を向ける。

「マジだ。戦時に米軍の捕虜に牛蒡を食べさせたら、草の根を食わせたつていつて戦犯になつたつて話があるぐらいだからな」

「ひでえ話だ」

颯は感心した顔をしながら鶏肉に手を伸ばす。

「肉ばかりではからだに悪いですよ」

紗紀の忠告を聞いたのかどうか、大量の野菜を皿に盛つていく。

「野菜も大量に食つてるから大丈夫だぜ」

「その割りには太らないのよね」

「喋りすぎなんじやないのか」

和成の言葉に女性陣は無言で同意を示す。

「そんなにしゃべつちやいねえだろ! 大体お前らはいつもいつも俺のことを……」

箸をおいて語り始めた颯をよそに、和成は白米をほおばつた。冷や飯はそれはそれで楽しめるものの、やはり炊きたての白米ほどいいものはなかつた。

真剣な表情で口に食べ物を運んでいく和成を見て臥月が苦笑いをする。和成自身、食事中の集中力は戦闘中のそれに勝るとも劣らぬ自信があつた。

じやが芋も煮崩れを起こしておらず、なおかつ柔らかい食感だった。

「そういうやつ、さつきの敵はなんだつたんだ? お前ら結構余裕そうに見えつけど」

「ああ。なんか土の塊みたいなのと、九尾」

「は？ 九尾？」

颯が箸を止める。

「とんでもねえな。でもあれだ、実体はなかつたんだろ？」

「どうだか。でも火は熱かつたし、殴つた感触はあつた。やたらブヨブヨしてたけどね。あんなもの想像の産物に過ぎないからな。要是ただ尻尾が九本あるキツネ。珍しい未確認生命体みたいなもんだよ。幻覚だつたのかもしれないし」

「淡白！ 淡白ですよカズさん！ 幽靈とか信じてないもんねお前」

「信じてるよ。お前が数学で満点を取れる可能性ぐらいにはな要するに信じてねえじゃん！」

颯がわめく。術者だからか靈的なものを信じている颯や紗紀とは違い、和成や皐月はその存在に否定的だつた。

お前ら鬼だろ？ と颯に言われることがあるが、和成の自己認識は「人間九割、鬼一割」というところだつた。能力を使わなければ普通の人間でしかないため、自らが超常の存在であるという自覚が湧きにくいのである。

「別にあいつらがプラズマでも幽靈でも妖怪でもいいんじゃん。襲つてこないなら放置、襲つてくるなら倒す。結局そこだと思うんだよね。言葉が通じるといいんだけど」

皐月は冷静に分析しながら、しかし箸は休ませない。

「見所はむしろカズ君の暴れっぷりのほうにあつたかな。なんだつけ、ハヤちゃんとカズ君がやつてる敵をなぎ払うゲーム」

「将軍無双か」

「そうそれ。あんな感じよね。金棒一本ブン回してる高校一年生つてなかなか珍しいし」

「珍しくない光景だつたら嫌だろ  
「そう何人もいてたまるかよ……」

和成は学校のクラスメイトたちが全員金碎棒を持ってきている光景を頭に思い浮かべる。余りにもシユールで笑いも起きない。流血沙汰は起きそうであるが。

「どうでもいいけどお前らまた合体したの？」

颯の言葉に和成の表情が凍りつく。皐月も箸を止めた。

一人でいる間はあまり気にしていないが、鬼が精神を食うと全ての感覚を共有するということは良く知られている話である。大人なら避ける話題ではあるがそこは高校生である。鬼以外の人間からは興味をもたれる話なのだ。

「…………ほーう」

颯がニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「どうなのよ、おっぱいの重さとか、イチモツがズレる感覚がツ！」

隣の紗紀が後頭部を叩いた。

「下品です！ ほんっとうに颯さんはいつでもどこでも

すぐに顔を赤くするあたり、相変わらず紗紀は下ネタには弱いようだ。そこまで嫌がつてゐるわけではないようだが、食事中にも振つてくるあたり颯が最悪なことは間違いないだらう。

「…………えっとね」

皐月が人差し指を顎にあてるわざとらしい仕草をしながら口を開こうとする。

「オイマジでやめろ」

「皐月さんも話し始めてくださいよう！」

和成と紗紀に割つて入られて皐月が口を閉じた。

「するいぜ…………なあ紗紀ちゃん、合体しよう！」

颯が隣の紗紀に抱きついた。飲んでいるのは緑茶だけだというのにテンションは居酒屋の悪い客のようである。

「やー！ やー！ 一人も見てないばかりで助けてくださいよ！」

「そこまでにしとけロリコン」

「ロリコンー？ 僕と紗紀と一歳しか違わないんだけどー？」

荒れ始めた食卓を囮みながら、和成はいつもペースを取り戻しつつあることに充足感を感じていた。

「あー、なんか悪いな。放置して帰るのは心が痛むんだが……」

大の字で横たわっている親友を思い出して颯は口を開く。

疲労の限界にいたらしい和成は、夕食を食べ終わってすぐに地面に倒れこむようにして爆睡してしまっていた。

「別にいいよ。後片付けちやちゃっとやるだけだしね。台所も広く

ないから一人しか立てないし。いいから紗紀を送つてあげなよ」

「そうか。まあそういうなら、そうさせてもらいますぜ」

颯はひょうきんな笑みを浮かべる。

「ありがとうございます、皐月さん」

「いえいえ。それじゃ、また明日。遅刻するなよ」

「だつてよ紗紀」

「アンタにいっただのよ」

「ですよねえええ！ それじゃ、また明日」

「はいはい」

今度こそ茶化さず別れの挨拶をすると、颯は鬼崎家を後にする。その背を追う様にして紗紀がついてきた。

空気は黒く、暗かつた。薄着をしているのはいつものことであるはずなのに、今日は風がやけに冷えている。

「爛ラン」

その言葉を発した刹那、颯の頭上に柔らかい光が灯る。薄明かりに照らされる視界の中に、溢れんばかりの桜が咲き誇っていた。颯は目を細めながらそれをしげしげと見つめる。

「あの……颯さん」

ポケットに手をつっこみのろのろと歩いていた颯の背に、紗紀からの声がかかる。

「ん？ 何？」

「ここ最近、異形の襲来があると悪いませんか」

「あー」

颯は返答に困つて語尾を延ばしたままにする。彼自身も感じじと

てはいたものの、

「ちょっとと思ってた」

「……ダム建設と関係があるのでないかと思っているんですが、どう思います?」

「ダムとねえ」

颯は歩きながら顎に手を当てる。

術者である颯や紗紀の家には脈々と伝わってきた古文書があるが、そこにも過去、田鬼村で「祟り」のような出来事が起きた記録は記述されていた。

だが颯には一つ引っかかっている部分があった。

「ダム建設に反対している意思が働いたことで異形が現れるのって、なんでこっちに攻撃してくるんだ?」

「…………それなんですよね」

颯の指摘に紗紀が俯いた。内心で否定的な突つ込みをしてしまったかと反省する。

これまで、自然発生した異形を狩つたり、一般人に危害を加えようとしているはぐれ異能者と戦つたり説得したりというのが主だったが、最近の異形は明確に田鬼村を襲つてきている場合が多くつた。

始めのうちは「田鬼村に異能者が多いから襲つてきてる」のだろうと推測していたが、それは襲撃が倍増する理由にはならないだろ。幾ら和成が鬼だといっても、和成一人が帰郷してきたぐらいで大きな影響を及ぼすとは思えなかつた。

会話が尽きてしまい、颯は頭を搔いた。同じ術者であり、家も近いことから何かと共通点は多かつたが、共通の話題があるかといわればそうではなかつた。

四人でいるときならばなんとなくネタに走るもの、一対一だと会話に悩む。紗紀は一人きりのときはピコハンを使わないと、颯が暴走していくもいさめることがない。

「おばあちゃん」

隣の紗紀が足を止めて声をあげる。気づけば田の前に老婆が立っていた。

和服に身を包んだ彼女の顔は、紗紀と良く似ていた。齡七十を回つているものの、全身には静かな力を纏っていた。

「村長さん、いらっしゃわ」

綾織紗枝。紗紀の母方の祖母にして、この田鬼村の村長だった。

「ああ。紗紀。それに颯さん。いんばんわ」

「おばあちゃん、会議は……どうでした？」

「駄目ねえ。どこままでいつも平行線でしたよ。もつ議会は抜けた

ううですし、建設が始るのは時間の問題かと」

「…………そうですか」

紗紀の表情が暗くなる。なんと声をかけていいものか分からず、颯は目を泳がせた。

「あの、おばあちゃん。お母さんに遅れると伝えておいて貰えませんか」

紗紀が口を開いてそう伝える。隣の颯が怪訝な表情をする。

「どこかに行くんですか？」

「戻る」

そういうと紗紀の祖母は少し寂しそうな顔をして 不意にその

顔を颯の方へ向けた。

「付き合つてあげてもらえますか」

「モチロンですとも」

颯は胸を叩く。辺に力んでしまったせいですが、笑いながら手を挙げてそれを「ごまかした。

「でもいいの？ 僕居ると邪魔？」

「いえ。一人はちょっと怖いので」

「オーケー。しっかりボディガードさせてもらいますぜ。あ、家まで送るんで安心してください」

「助かります。ありがとうございます、颯さん」

「いいえいえ」

深く頭を下げる紗枝の姿に気圧されて、颯も思わず頭を深く下げた。

暗闇へ消えていく紗枝の姿を見送つてから、颯と紗紀は一人で暗い農道を歩いていく。

会話はさきほどと同じように途絶えていたが、何を言つていいか分からず颯は沈黙を守つたままだった。三月末という時節柄、耳をにぎわせてくれる虫の声がないため余計に沈黙が痛い。

急な坂を一人で歩いて上つていく。山吹の丘には朝とは違つた寂しさが漂つていた。

「……見納め、ですかね」

「かもな」

颯はカツラの大樹に寄りかかりながら、隣に立つ少女を静かに眺めた。

丘が無くなる。

村が削られる。

飄々として見せてはいるものの、颯自身もかなり堪えていた。耳を澄ませば聞こえてくる川の音と、風に揺れる山吹を見ているうちに、茫々とした記憶が頭の中を通り過ぎていく。

そもそもこの丘の祠を管理しているのは颯と紗紀の家である。

何かを祭つてはいるのではなく、術式を発動させるための道具やら文書が安置してあった。

颯から見ても古くさく役に立たなそうな術ではあったものの、先人たちが守つていてくれるような気がして密かにお参りなどをしたものだつた。

「そろそろ、帰るか？」

「ええ……」

亡靈のような足取りで歩き始めた紗紀の後を追おうとして、颯は視界に赤白ストライプの境界杭を確認する。

「……」

何故かは分からなかつたが無性に腹が立つてきて、颯は思わず呪

詛を込めて一喝口にする。

「斬」

やつてしまつてから何をしてるんだと反省するが、後の祭りだつた。境界杭が滑り落ちるようにならに斜めに切断され、小さな音を立てて斜面を転がつていった。

颯は自分の手を見つめる。

「……颯さん」

紗紀が怪訝そうな表情で見つめていた。どうやら見られてしまつたらしい。

「……わらい」

颯は一度二度手をはたくと、紗紀の側へと駆けていった。

## 六・フラグを壊す村民たち

誰もいない居間で和成は一人目を覚ました。能力者であつても体は基本的には人間と同じであるため、疲労の溜まり方は人と変わらない。力を使い終わつた後に意識を失つたように眠り込むことも日常茶飯事だった。

なにか音が聞こえたような気がして耳を澄ませば、どうやら台所からの水音らしい。

立ち上がって台所の方へと向かう。

「悪いな、皐月。お前も疲れてるだろ？」

同棲生活みたいだなと思いながら、台所に立つて黙々と食器を洗つていた皐月の背中に声をかけた。

「あれ？ 起きてたの？」

「目が覚めたんだ。すまん、替わる」

「いいよ。もう終わるし」

皐月の返事を受けて、和成はテレビのスイッチを入れる。最近良く見る若手漫才師が、ややズレた掛け合いを繰り返していた。

お笑い番組は嫌いではなかつたが、しかし言葉が頭に入つてこなかつた。大きく溜息をついて、テレビをニュースに切り替える。殺人、汚職、環境問題 ニュース番組が大袈裟に取り上げているということも含めて、和成の気を滅入らせるのには十分だった。

「……ダムのこと気にしてるでしょ」

「ん……。やっぱ気にしてるよう見えるか」

和成は精一杯笑つて見せるが、皐月の表情はより不安気なものになる。

「いざとなつたら実力行使つていう手もあるわよ」

「実力行使？」

「能力を使えば何だつてできるでしょ？ 仕切りの杭を抜いてもいいし、組み始めた建築土台を夜のうちに壊してもいい。仮設のトイレや資材置き場を移動したりすれば作業が鈍るのは確定だよ。それでやめてくれるかどうかは分からぬけど、作業の効率を悪くするぐらいのことはできる」

皐月の言葉には霸気がなかつた。恐らく、本当はそんなことを言いたくはないのだろう。穩便に済ませたいといつ思には誰も一緒に、その一方でダム建設を許せないのも一緒だった。

「そうか…… そうだよな。余り褒められたやり方じやないけど、能力を使えばある程度のことはできる、か」

和成は意味もなくただ天井を見つめていた。

皿洗いを終えた皐月が、和成と対面するよつにして腰を下ろした。

「なあ皐月」

「なに？」

「夏になつたらみんなでプールいこうよ」

「……急にどうしたのよ。水着姿でも見たくなつた？」

和成も自分がなぜそんなことをいつたのか理解できなかつた。

「そうだよ。十六の女子高生と水遊びできるチャンスなんて一生ないだろ？」

「おーつと、冗談のつもりだつたのにその反応は返しにくいやつ

皐月はそういうて微笑んだ。和成も笑う。

「やっぱこじは滅茶苦茶楽しいわ。都會なんかよつよつぽどね」

そう言って方を竦めた和成は、皐月が漬けておいてくれた沢庵を齧る。それからお茶をうまそうに啜つて小さく息を吐いた。

「やっぱ全体的にジジ臭いわ」

「渋いって言つてくれ」

それからは一人で思い出話に花を咲かせた。定期的にはあつていたものの、こうして一対一で腰を据えて話したのは久々である。お互いに相手が話しかけてくるのを待つてはいるかのよつな空氣の中、先に口を開いたのは皐月だつた。

「彼女は出来たの？」

「残念ながらできなかつたね。三月にいなくなるつて知つてたせいかバレンタインの義理チョコは多かつたけど」

「あれだよねー。カズ君は『役立つ優男』みたいなポジションだから、恋愛対象に見られていないのかも。運動神経良いんだし、運動系の部活に入るとかさ」

「そうだつたのか……。何だ、もつと早くアドバイスをくれればよかつたのに」

「貰い手がなかつたら私が引き取つてあげるわよ」

「そりや嬉しい。皇月なら言うこと無しだ」

田の前の皇月が急に顔を伏せたのを見て、和成は不安そうな顔をする。

「どうした……疲れてるのか？」

「なんでもない」

そういつて顔を上げる。その顔がこころなしか赤みがかつてているのに気づいて、

「顔が赤いぞ」

「お茶が熱かつたの」

どこか怒つたような口調で、ついわれて和成は口をつぐんだ。またも訪れた沈黙を、皇月がもう一度破る。

「なんか帰るの億劫になつたから、泊まつていつてもいいかな。一人の時つて水がもつたいたくないでお風呂に入る気が起きないんだよね。ああ、シャワーは浴びてるよ？」

「……別に風呂入つてこつが寝ていこつが構わないけど、替えの服はもつてきてるのか」

「下着はあるから寝間着だけ貸してもらえると助かる」

いろいろと無頓着な幼なじみだと改めて実感しながら、和成はお茶を一口飲んで立ち上がる。

「じゃあ風呂洗つてくるわ」

「待つて！ 露天風呂入ろううよ」

幼なじみの提案に和成は少し驚いた顔をする。そういうえばそんなものもあつたなあと記憶の隅に露天風呂の姿を捉えた。

「構わないけどすぐには入れないぞ？」

「全然いいよ。カズ君~~寝~~寝し過ぎたし、すこしごらり夜遅くなつてもいいでしょ？」

「まあ俺の方は気にしなくていいんだけどね。じゃあ洗つてくるわ。三十分ぐらいしたらいいよ」

和成はそう言い残してその場を後にした。

和成の家には風呂が二つある。

一つは家についているもので、もう一つは屋外にある露天風呂だ。風呂好きの父親が作つた本格的な岩風呂で、サイズは十メートル四方ほどとかなり大きなものである。

ポイントは風呂であつて温泉ではないところだつた。日鬼川の水を溜めて入るのだが、水を温める装置などはない。つまり物を熱する力を持つてゐる鬼崎家人間が居ない限りは入浴する事ができないのである。

「……こんなものかな」

使つていなかつた風呂を手早く掃除すると、和成は近くに置いてあつたドラム缶を両手に持つた。川の水を汲みやすい場所まで歩いて行くと、一百リットルもの容量があるドラム缶一杯まで水を組む。同じ動作を繰り返して二つのドラム缶を満杯まで、合計四百リットルという馬鹿げた量の水を一息で運びきつた。

「流石に重いな」

ぼやきながら四百リットルの水を流し込む。これだけの量を運べても風呂が広すぎるせいで一考に溜まらなかつた。仕方なく近くにある水門を開くことにする。

水門といつても大岩が一つ置いてあるだけである。下手に岩を動

かすと周囲一体が水浸しになる可能性があるため、軽率には動かせない。

一トンはある大岩を持ち上げる。日鬼川の水が猛烈な勢いで露天風呂の方へ流れしていくのを見届けて、岩を所定の位置へ戻した。

目一杯まで溜まつた水を満足気に眺める。

風呂の上部にある白熱灯のスイッチを入れてから、浴槽に手を突つ込んだ。

「……冷たいな」

能力を使わずに手を突つ込んでもみると、やはり川の水は冷たかつた。

和成は周囲の熱を吸收して右腕に収束させていく。その気になれば鉄すら融解させる温度でもって風呂の水を徐々に温めていった。出力が弱まってきたため、持つてきていたガソリンを使って近場の薪に火をつける。燃え上がる炎の熱エネルギーを吸收して右腕の熱に変換した。

非合理的に見えてその実は合理的である。直接火の元を水に突つ込んだ方が早く暖まるのは当然のことであるが、薪のような「燃えている」ものをそのまま水中に投げ入れれば火が消えてしまうだけである。

背後から足音が聞こえてきた。恐らく皐月だらう。

「できた？」

「ああ、多分入れる……おお」

返事をして振り向いて、思わず地面に尻餅をつく。脱衣場代わりの木の小屋があると、木の小屋があると、あるつことかタオル一枚で露天風呂まで歩いてきていた。

「……なに？」

「なにってなあ……もう少し格好に氣を使つとかさ」

「でも水着より露出部分は少ないと思う」

「えー……。あー、そうだけどな。そうだけどそういう発想でいいのかよ。女子つて水着はいいけど下着はダメとかそういうのがある

んじやないの」

「どうせ布きれであるといつに変わりはない気がする」

「なんとなくその答えは予想できてるよ。じゃあ、後は好きに楽しんでください。出るときには呼んでくれ」

お湯にもう一度手を突っ込んで頷いてから和成は立ち上がる。背を向けてその場を後にしようとする。

「えーー!? 一緒に入らないの?」

皐月が大きな声を上げる。

「はあ! 一緒にに入るつもりだったのか! ?」

「いいじゃん。いまさらそんな事で躊躇う仲でもなし。女の子と風呂に入る貴重なチャンスだと思えば」

「これでも純情なつもりなんだけどな」

和成はぶつぶつ言いながら服を脱ぎ去った。タオルを腰巻のよう

に体に巻きつけると、やや躊躇いながらも風呂に浸かった。

「……」

「二人で温泉に浸かる。

「なんか田を逸らされてるとこいつも意識しちゃうんだけど」

皐月の言葉で和成は視線を皐月の方に移す。できる限り目に力を込めて、皐月の顔をしつかりと見据えた。

「怖いよ」

「だよな」

和成は風呂に顔をしづめてぶくぶくと泡を作った。この場に颶があれば平然と全裸で暴れていそうなものではあるが、和成にそこまでの勇気はなかった。

「ねえ、カズ君」

皐月がどこか甘い声を出す。ほぼ裸に近い格好をしていることもあり、和成はややとまどった。

「……なに」

「バイク、何乗るか決めた？」

「……金があればカワサキのザンザス」

何か色氣のある話を期待してしまった和成はそれを恥じた。また

バイクの話かと思いつつも、嫌いではないので乗ることにする。

「四ストマッハの加速なんて欲しいの？ 足回り弱いし、クセ強いよ」

「ZX-Rでもいいかなと思つてる」

「カワサキ好きだねー。なぜに？」

「男は黙つてカワサキなんだよ……といつか臯月、お前本当に色氣がないな」

「色氣ねえ。都会は違かった？」

「化粧なりなんなり熱心だつたよ」

「いいたいことはわかるっちゃわかるけどね。でもあれでしょ、都会の学校もグループがあつて派閥があつて、大体ルックスの同じ女子が固まつて、文化祭のときはうるさくて、男子はやる気がなくて、つて感じでしょ。それでいて恋愛には夢見がち。学生時代の恋愛なんて全部駄目になつて、最終的に自分の稼ぎもないくせに年収にもうるさいような女になるのよ」

全國の女性に喧嘩をふつかけるような物言いだった。

「どうしたんだよ……もちろん俺はそれが良いと思つてる訳じゃないぞ」

「べつにい。カズ君が都会に毒されてるみたいだったから忠告しただけ」

臯月は横を向くと、それきり口を閉ざして喋らなくなる。

何かまずいことを口走つただろうかと思案する和成の横で、臯月が川の方を見つめていた。

無言でいると川の流れる音が聞こえてくるのが分かる。ここから海へ流れ出て、また雨となり上流から循環するのだろう。理論では知つても、想像が追いつかないほど壮大な話だと和成は考える。

「臯月」

そろそろ上がりうと思ひ声をかけるが、臥月からの返事はない。悪質なジョークだうと思つて放置して立ち上がるが、反応がないことから本当に寝てゐるのだと思つて側まで近寄つた。

「おー、臥月？」

肩を掴んで軽く揺するが、田を覚ます気配がない。仕方なく体を抱き起こして、お姫様抱つこの格好で自宅の方へと歩いていく。肉付きのいい体に少しどきりとした。最近の女子は痩せすぎだと思つていた和成にとつては、臥月ぐらこの体つきが理想的なようだ。うなづいた。

「……あれ

玄関をくぐつたといひで臥月が田を覚ました。

「起きたか」

「……えつと、これからベッドルームに連れて行くつもりだつた？」

「俺の部屋は布団しかないからお前は居間で寝てくれ

恒例のジョークを華麗に無視して臥月を床に降ろす。

「えー！ なんか出そう！」

「魔王が出てきてもお前には勝てねえよ」

「来週からは触手少女・ミラクル臥月をお送りします」

「いいから着替えて寝ろ」

寝間着をひつつかんで臥月に投げ渡すと、和成は居間に布団を敷き始める。あらうことかその隣で臥月も同じ行動をし始めた。

「……なにしてんの？ 俺が敷いてるのがお前さんの分だぞ」

「一緒に寝ようよ」

「それはいけない。いけないよ臥月さん」

「昨日も寝たじゃん」

その言葉に和成は返事に詰まつた。昨日は厳密に言へば「寝た」のではなく「寝かされた」が正しいが、そんなとこひを忠告しても意味がないだろつ。

「一つ問いたい。なぜ？」

「お泊まり気分で」

「もう高一なんだけどな……」

しばらく不毛な言い合いを続けて、結局は和成が折れる形で隣合わせの布団で寝るハメとなつた。

皐月は安らかな寝息を立てて熟睡していたが、和成は一人悶々としていてほとんど眠れなかつた。

一時間ほど理性と格闘した後、和成は一人寝室の方へと移動した。

## 七・それぞれの思惑

普段は誰もいない県知事室であつたが、今日は珍しく丸眼鏡をかけた男の姿があつた。

県知事の大谷である。いつもの神経質そうな表情の変わりに、今日は下品に口角を上げていた。ダム建設が始まつたことを受けて、彼の懐にも金が転がり込んできたためである。

部屋のドアが一回叩かれる。

「入れ」

「失礼します」

秘書らしい中年の女が、片手に数枚の紙を掴んで歩いてきていた。

「大谷さん。こちらは……」

女が持つていた紙には細かい金額が書かれていたものの、選挙の時に公表していた価格とは大幅な差異があつた。

「ああ、ダム建設の費用としてつけておけ。材料費の一部だ」

大谷の言葉に秘書の女性は躊躇を見せるが、射すくめられて返事をする。

「…………了解しました」

「下がつて良いぞ」

室内から出て行つた秘書の背を見つめながら大谷は笑う。

大谷の計画は順調に進んでいた。ダムの建設費用からかなりの額をくすねることができそうである。加えてゼネコンからの賄賂も、今回のダム建設ではかなり大量に貰つていた。

東京大学の受験に失敗して以来、どこか華の欠ける人生を送つていた大谷だったが、今回ばかりは成功の兆しに胸を膨らませていた。まだ五十とこれからがある。息子が無事東大に入学したこともあり、彼の今後の人生は薔薇の紅あかに彩られていた。

「大谷さん！ 現地の建設業者に重大な問題が発生したそうです……」

…！」

先ほど出て行つた秘書が急に部屋に入つてきた。顔を青くしている。

「なに……？ あそこの土民どもめ、また何か引き起こしたのか」「こちらを」

秘書が持つてきたノートパソコンに映し出されていたのは、何かが潰れて大きな穴が開いている写真だった。太田はその見出しを見て絶句する。

「何だと！？」

予想不能の事態に混乱しながらも、太田は建設業者のナンバーへと電話をかけた。

「カズ君、起きて！ カズ君！」

皐月の叫び声で目を覚ます。なにやら焦つているような聲音に和成も驚きながら立ち上がった。

「テレビ！」

寝室から走つて居間の方へと向かう。入り口に肩をぶつけてそれをさすりながら中に入ると、皐月がテレビを指差していた。

『……県で建設中の日鬼ダムにおいて』

視界はまだぼやけているが、話だけ聞き取つた限りではどうやら日鬼ダムの話らしかつた。全国放送で何の話をしているのだろうか。テレビの画面が切り替わる。映し出されたのが日鬼川の光景だといつのを理解するのに時間がかかつた。

「なんだこれ」

和成は思わず声をあげた。

川には報道陣が詰め掛けている。その前方で、作業用のショベルカーがバラバラになつていた。土地の仕切りとして立てられた杭も

鋭利な刃物で刻まれたように上部が落ちている。

仮設便所は倒壊、プレハブの事務所は粉々になっていた。

もつとも酷い被害を受けていたのはダンプカーで、前半分が粉微塵に吹き飛んで周囲に黄色い鉄の破片を散らばらしていた。

「なんということでしょう！　ダンプカーが……」

和成もテレビでみたことのあるベテランの男性キャスターがカメラに向かって喋っているが、その表情にはプロらしさが感じられた。異常な事態に気が動転してしまっているようだ。

「和成じやないよね」

皐月の言葉に和成は首を横に振った。

「俺じやない」

自分でもこれは難しいだろ？と和成は考える。

日鬼村屈指の力があるのが自分ではあるとはいえ、ここまで完全に破壊するとなると厳しい。

ダイナマイトでも持っているのなら別だが　よほど強烈な爆発物が無い限りはダンプカーを吹き飛ばすことはできないだろ？。

「もう一つ聞きたいんだけど……和成ならできる？」

「うーん…………どうだ？　でも内部から破壊されてる感じだし、無理じゃないか？　例えばダンプを力尽くでバラして、その破片を金碎棒でボツコボツに殴ればなんとかなるかもしれないけど……絶対に音がうるさいしバレるって」

「そうだよね。どうしよう……とりあえず学校に行こうか。みんな行つてるかも知れないし」

「そうだな」

和成は適当な上着を羽織ると、寝巻きのまま家から飛び出した。

日鬼農業高校の校庭には多くの生徒たちが集まっていた。有事の

際の避難場所から祭りをやるときの会場まで、何かあつたら学校の校庭といつのは昔からの習慣である。広い場所ならそちら中にあるものの、「公園」のように整備されている空間がほとんど無いため、他に選択肢がないというのが理由であった。

生徒達の表情は一概にして不安の色を帯びていた。恐らく和成と同じ気持ちなのだろう。やり方が強引過ぎること、実際にどんな手段でやつたのか想像が付かないこと、心中を察するのにはもう難しいことではない。

校庭に着くなり女子グループの方へ駆けていった皐月を田で探していると、紗紀の姿が目に入った。校庭に植えられた木に背中を預けるようにして、静かに空を眺めている。

「おはよっ紗紀」

「あ……おはよっ」やれこませ

紗紀にしては珍しく返事に霸気がなかつた。

「……どうした？ 体調悪いのか？」

「いえ、そんなことはないですけど……すいません」

それだけ言うと木陰の方に歩いていつてしまつ。どうしたのどうかと心配しながら、和成は校庭の中央へと歩を進めた。  
「この中でダンプを木つ端微塵にできる人がいれば拳手を」  
三年生の男子が冗談交じりにそう声をかけるが、もちろん誰も手を上げはしない。

「お前なら壊せるか？」

男子生徒がそういうて和成の方を向く。やはり自分に来るかとは思いながら、話を振られた和成は正直に口を開く。

「叩き潰すぐらいなら可能だと思います。でも、テレビで見た限りはダンプカーは内側からの衝撃で破裂しているように見えました。僕の能力では流石に難しい」

「そうだよなあ。あれは本当にダイナマイトでも持つてこないとできない感じだもんなあ」

自問するようにそうつぶやくと、先輩は地面の小石を蹴り飛ばし

た。

「こんなことをいうべきじゃないかもしけないが一つだけ聞いて欲しい」

ざわついていた校庭がその男の一聲で静まりかかる。

学校長である初老の男性　　山中が、憂鬱そうな空氣を漂わせている集団に向けて静かに口を開いた。

「もしやっている者がいるとして、私個人はそれを正面から批判することは出来ない。教員の立場として不謹慎な言葉かもしけないが、そう思つていることは事実だ。ただ、人や自然を巻き込むことだけはやめてほしい。先ほど確認してたら、ほんの少しではあるけれど田鬼川にガソリンが流れ出てしまつていた。これでは下流の魚に悪影響がでてしまう」

それは和成も思つていたところだつた。自然を守るにしてはやり方があまりにも強引なのだ。確かにダム建設が川や森を傷つけるのは確かだが、その行為への反対活動をしている側が同じことをしているのでは説得力に欠けるというものである。

「もしいたら、後でもいいので名乗り出て欲しい。私も何か方法を考えたい」

山中はそれだけ言つと、「それでは、怪我のないよう」 と締めくくつてその場から離れていった。校長就任当時から「教師の視点に囚われない人物」と言っていたが、やはりその通りである。簡潔で人情味のある話に感動すら覚えながら、和成は皐月の姿を探し始めた。

校庭の端の方でその姿をとらえるが、どうやら紗紀をはじめとする女子たちと話し込んでいたようだつたので距離を置いてたたずんでいた。話が長くなりそうなので先に帰つてしまおうかと思つてたところ、肩が控えめに叩かれる。

振り向いてみれば真剣な顔をした颯が立つていた。

「なあ、カズよ」

「どうした」

「今日の夜、張り込みしねえか？」

颯の目には力が籠つていた。和成は静かに頷くと、颯の話に耳を傾けた。

それから夜までは部屋の整理をして時間を潰すことにした。村中が騒いでいることもあり、何となく回りがせわしなかつたので誰かに声をかけるのも悪いかと思つたからだ。

昼食と夕食の際はいつも三人が家に来た。夕食後の片付けを女子一人に任せ、颯と一緒に外へ出る。皐月と紗紀に怪訝な顔をされたものの、そこは颯が適当に誤魔化した。

日鬼川の下流 ダンプカーが潰れている場所まできて和成は息を飲む。目の前に広がる惨状は思つてはいる以上に酷く、目も当てられない状況だつた。

「お前、何か隠してるだろ」

和成は適当なサイズの岩に腰掛けて颯に話しかける。

「実はよ。昨日の夜お前がぶつ倒れた後さ、紗紀と一緒に山吹の丘に行つたんだわ。で、そこで仕切りの杭を一個壊したのを見られたつぽい」

「何してるんだお前」

和成は呆れた顔になる。もし誰かに見られていたら犯人扱いされてもおかしくはないだろう。村民ならばやつてないと言えれば信じてくれるだろうが、外部の人間であればそうはいかない。

「いやあ……ちょっとイラつときてよ」

颯は頭を搔いた。反省はしているらしく、その表情にふざけたものは感じられない。

「で、見られたのか」

「多分ね。今日紗紀の表情が浮かなかつただろ。多分、あの後俺が下流まで下つていつてやつたと思つてるんじやないかな……」

「厄介！」とより厄介にする幼馴染に呆れて、和成は右手で顔を覆う。

「……一応聞こう。お前じゃないんだな？」

「まざでかるかできないかって話で恐らくできないぞ。爆発系の術もあるけどダンプをぶつ壊せるほどじやねえ。まあ、徐々に徐々に何回も爆発させりや……あれ、できなくはないな。あれ……もしかしたらできるかもしけねえ」

颯は顎に手を当てて、できるかどうかを真剣に考えているらしかった。暫くの間に後に顔を上げて、

「けど俺にしちゃあコーモアがないだろ？ 作業員のズボンのケツの部分を破るとか、ショベルカーの座席にクソをするとかだったら俺っぽいけど」

「ああ。確かにお前に特有の下品さが感じられなかつた。もつと感情的にやつてるよつに見えたな」

「…………」

和成の指摘に颯は押し黙る。俺は上品で通してるんだ、と全く信頼できないことを口走りながら、やがてその口数が減つていいく。急に真面目そうな顔になつたかと思つと、静かに口を開いた。

「腹が減つてきたぜ」

「何かと思えばそんなことか」

「重要だぞお前。衣食住つていうけど、衣住と違つて食は即、死に繋がるからな。大体日本の食料自給率は……」

無関係なほうへと発展を始めた颯の話を聞き流しながら、和成はリュックサックを開いて中身を搜索する。家に一度帰つたときに作つておいた夜食が入つていてるはずだつた。

「家で作つてきたのが……あつた、ほれ」

和成はリュックサックからカツサンドを取り出して手渡した。

「お、お前が作つてきたの？ 俺のために！？」

「お前のためにじやない。自分のために作つてきたんだよ。夜食だ

夜食

「いいのか相棒。お前が餓死してしまったなら俺は」

「まだあるから気にすんな。向こうで買ってきたサンドイッチ用のパンの期限が近かつたから早めに オイコラ話を聞けよ」  
颯は深刻な表情で和成の方を見つめながら、口をもそもそと動かしていた。

「きいふえるふえ」

「…………」

「おー、うまいですな……。味付けは俺よりいいなあ。だがキャベツのみじん切りなら俺の方が上だな」

「お前の能力は根本的にずるいだろ」

都内にいたころ、ちょっと上等な店でトンカツを食べた事があるが、そのキャベツの千切りも颯の域には至っていなかつた。

「うめえ、うん。」じちそつさん

「はええな」

一瞬でカツサンドを喰いきつた颯が満足そうに笑う。

「そうだ、一月の話だけどよ」

颯が思い出話を始める。皐月とはまた違つた角度からの村の話を耳に入れながら、和成は川の方を静かに見守つていた。

「朝日が綺麗ですね」

隣で颯がつぶやいた。木に登つて地平線の方を眺めてみれば、朝日が燐々（さんさん）と輝いていた。一日中話し続けていたために喉は枯れ果てていて、声がややおかしくなつていた。

「随分くつちやべつてたなあ」

「なあ……カズ」

「どうした」

「今日さあ、みんな誘つて川で泳がないか？」

和成は呆気に取られた表情で颯の方を見つめた。外気の冷たさたるや半端ではなく、和成の感覚で判断するなら気温は五度を下回つ

ているだろう。

先日も自分が皐月にプールを提案したことを思い出すが、和成の想定はあくまでも屋内の温水プールである。

「……マジかよ」

「ほら、和成ファイサーもあるじゃん？ なんとかなるんでねーの？」

「いや……」

「じゃあちょっと入れるかどうか試してみようぜ？ な？」

颯に手を引かれて川の方まで歩いていく。和成は手袋を外すと片手を突っ込んだ。

露天風呂に引いてきた川の温度より更に冷たい。和成は首を左右に振る。

「絶対に無理だ」

「頑張れ頑張れできるできる絶対できる頑張れもつとやれるつて！ 気持ちの問題だ！」

「絶対に泳げないね！ 冷静に考えたら真夏でも一時間泳いでりや体が冷える水温なんだから無理に決まってるだろ！」

全身に熱を纏えば泳げないこともないが、猛烈にエネルギーを消費するために現実的ではなかつた。

「物事を決め付けてる人間に明日はねえぞ！ みてろよ和成！ 僕の漢つぶり！」

「何を？」

する気だ、と続けようとした和成の前で颯が服を脱いで準備運動を始めた。どうやら飛び込むつもりらしい。

「正気かお前」

「男は度胸、何でも試してみるのぞ」

言葉だけをとれば非常に格好が良かつた。朝日に光る長髪や高い身長と相まって、このワンシーンだけを切り取れば重永颯に惚れる女性は幾らでもいるだろう。

「行くぜっ！」

助走をつけて一番深い部分へと飛び込んでいった。

「オウフっ！ おおっ！ ゆッヒー！」

飛び込んだ颯が奇声を上げる。水揚げされた魚のように跳ねながら、冷たい水と必死に戦っている。

続く叫び声は和成にとつても予想外のものだつた。

「つった！ つった！」

「馬鹿野郎！」

足がつたらしい颯を川岸に引き摺り上げる。結局和成もびしょ濡れになる始末だつた。

隣の颯が静かに息をつく。和成がいなかつたら本格的に溺れていたかもしれない。

「……なあ、カズよ」

颯は何かを悟ったような目で遠くの水面を見つめている。

「反省したか」

「誰を呼ぼうか」

つった痛みと水の冷たさに顔をひきつらせながらも颯が笑う。和成は静かに首を振つた。

足のつった颯を支えながら家まで戻り、別れてから布団に入る。時計を見ればもう五時を回つていた。遠くから二ワトリ フリードリヒのものらしい高らかな鳴き声が聞こえてきたが、和成はそれを無視して眠りについた。

## 八・破壊に次ぐ破壊

「……嘘だろ」

家で六時間ほど寝て、正午に目を覚ました和成はテレビをつけて絶句した。

映っているのはダム建設予定地にぽつかりと空いたクレーターだつた。既にボロボロな状態で横たわっていたショベルカーとダンプカーは、もう跡形すら残っていないといった状況である。

「あ、起きた？」

居間では皐月が昼食をとつてゐるといひだつた。

「いたのか」

「ごめんね。寝てたから勝手にやらせてもらつてた」

「いや、そりやいいんだけど またなのか？」

「みたいね。ターゲットは昨日と同じだけど、威力は昨日より大きい感じ。よほど作業車が気に入らなかつたんだろうね」

肩を竦める皐月の顔はどこか呆れが混じつていた。

破壊されているのならばもう壊す必要はなかつただろう。むしろ放置したほうが処理に一手間を取らせるという意味では妨害に繋がつたはずである。犯人はよほど外部からの侵入者が増かつたのだろうかと推察する。

「ちなみに俺じゃないぞ」

「分かつてゐるわよ。颶とずつと見張りしてたんでしょう？」

隠すつもりは無かつたが流石にバレていた。

「ああ」

「気をつけたほうがいいよ。カズ君とハヤちゃんなら出来るかもつて思うやつも居るかもしねないし」

「……そうだな。少し軽率だつた」

「それにカズ君がいないから私は一人寂しい夜を……」

「昼食は俺が作るよ」

「無視された……。カズ君のお父さん」「電話しよ！」

鬼崎和重四十一歳を頭に思い浮かべる。別に恐ろしい父親という

わけではないが、家族に電話をされるのは流石にまずい。

「マジやめる本当にやめるむしろやめてください」

「冗談だよ」

「胃が痛いわ……まつたくこれだから皐月は」

「なにおう！ 私がいなきや料理も作れないくせに……飽きたからつて捨てるのね！」

「何でそんなにテンション高いんだよ！」

「……何だ。今日が何の日か本当に覚えてないんだ」

寂しそうな顔をする皐月を見て、和成は思わず頭の中で考える。何かイベントがあつただろうか。

「……」

下手に踏み込んで地雷を踏むよりは、その場にどじまつてやり過ぎ方を選択した。

「冗談」

「なんだよ！」

皐月に文句をいいながら昼食の準備を進めていく。

生来手先が器用なこともあって、和成の料理の腕前は女性一人と同格かそれ以上である。颶に関しては能力を使うか否かによって出来栄えに天地の差が出るため、一概に比較することはできない。

「ねえカズ君。史書を漁つてみようと思うんだけど、どうかな」いいとも眺めていた皐月が声をあげる。和成は二ンジンを切る手を止めて返事をする。

「史書？」

史書というのはその名の通り日鬼村に伝わる歴史書だ。日鬼文字と呼ばれる漢文で記録されており、そのほとんどは綾織家が管理していた。

「言ひ忘れてたんだけど、ハヤちゃんと紗紀ちゃんは祠とかお墓を

回つてるのよ。何か術が仕掛けられてないかって

「……なるほどね。俺達の中に犯人がいるわけじゃなく、防衛トラップか何かが暴走した結果だと」

いつの日か異形の大群が攻め込んできたときに、村の南方に設置してあつた颶の「異形ホイホイ」で一体だけ倒したことがあつた。現場周辺で人間は目撃されていないが、ダムの建設予定地に攻撃するような術を組んで誰かが設置しているといつ可能性は大いにあり得る。

「たしかに術のチェックはできないもんな。史書を読むのも俺達には向きだけど、いろいろいってられない……か」

「じゃあご飯食つたら早速行こうよ。紗紀ちゃんのおばあちゃんに部屋を使つていいといつていわれてるから」

「わかった」

和成の作った昼食を食べて、一人は紗紀の家へと向かつた。

「……さてと、これが村の歴史書です」

和成は両手一杯に資料を抱えて部屋の中に足を踏み入れた。もつと埃を被つているかと思っていたが、きちんと手入れされているらしく読みやすい状態で保存されていた。

とにかく村の歴史が書かれている資料を片つ端から持つてきたという状況だった。結果が実るとは限らないが、何もしないよりはマシだろう。

民俗学者たちが見れば鼻で笑つか、民族伝承を伝えるものとして捉えるだろうが、こと田鬼村の史書に関しては記述の全てが事実らしかつた。紗紀の祖母の話によると、少なくとも曾祖母の一代前までの記述に誤りはない。もともと誰かの権勢を書き連ねるものではなく、有事の際にどう対応するかをまとめた諫言の書としての意味

合いが強かつた。

これだけの文字記録が残されていることを考へると、辺境の村にも関わらず、文筆に優れた人間は多くいたようである。村内で伝承している文字は今の日本語とは少し違い、どちらかといえれば中国語に近い。

「デジタルデータ化すればいいのにね。検索ワード『祟り』、ヒット数十件です、みたいな」

「携帯のメールと電報の違いが分からぬおじいさんおばあさんが居る村だしな」

「取り残されてるなー」

「進んでりやいいつてもんでもない。こんなに良い旧家があるのも日鬼村だけだし」

和成たちは蔵から一番近い和室を一間借りていた。紗紀の家は平安時代あたりの建築そのままで、やたらと広い寝殿造りの物件だった。

庭園が広がり、中には鳥居から仏像からなんでも存在している。時代の流れから完全に取り残されているように見えて、敷地内には家族たちの居住スペースであるバリアフリーの一戸建て住宅も建築されていた。村一番の金持ちは違うといったところだつひ。

「そうね。うじうじしても仕方ないし……あーあ、夏物の服を買に行きたかったのに」

「提案したのは臯月だろ」

むくれる臯月を見て和成は苦笑する。

「それはそうだけど。割り切れないものつてあるじゃない? せつかくカズ君と約束も取り付けたのに」

恐らくおとといのバイクの上でした約束のことだろ?。いまさらながらあれば暴力を背景にした脅迫じゃないだらうかと思つもの、口には出さなかつた。

「ゴールデンウィークにでも付き合つてしまふ」

変わりに違う言葉を口から出す。

「え……どうしたの。優しくてきもちわるい」「

「なんなのその対応。すげえ困るんだけど」「

「だつて……嘘っぽい」

「鬼は嘘吐かないんだよ」

「そういうえばカズ君は嘘つかないよね。やつは偉いな。私はじゃんじゃんつくけど」

「つくなよ。人としてもつくなよ」

「方便方便」

「二人でペラペラとめぐつていぐ。」

良く手入れされている畠から良い香りが漂い、障子紙からは薄い日の光が満たしていた。

「おー、それらしいの発見。読もうか？」

皐月が素早く記事を見つける。

「頼む」

「寛永三年六月　　徳川家光の頃ね、日鬼村に　　」

内容をまとめるということだった。

測量の手が山奥の日鬼村まで伸びたとき、余りにも潤沢な土地であることを知った政府の役人が、土地を直轄地にしようと計画、村民を追い出そうとした。するとその日から役人が泊まっていた宿泊宿にさまざまな異変が起こり始めた。馬は疫病で倒れ、ついには役人もそこで息絶えた、と。

「……胡散くさい。どつかの番組に投稿しようつよ。謎の怪文書発見つて」

「やめとけやめとけ。この村のことだから事実だろ。でもこれだけだと何か偶然起こつたって感じの気もするんだよなあ」

「そうね。この程度じゃあなあ……たまたま、つて可能性もありうる。でもどうする？　ダンプが爆発したつて記事はないと思つよ」

「べつに牛車でも人力車でも爆発してればいいんじやないか。通常では起こりえない現象が必然的に起きているつていう記録があれば

「ん、了解。でも難しそうだなあ」

ぼやきながら一人でページをめくつしていく。長大な村の史書は読み物として面白そうに見えて、しかし実際のところは日常生活がただただ書き連ねられている場合がほとんどだ。異形の襲撃があつても非常に低級な敵ばかりで、読んでいて驚くような記述はほとんどなかつた。

そしてなにより解読が面倒だつた。画面に書かれている日鬼古語は古文と漢文の中間のような非常に読みにくいもので、和成の頭を混乱させた。颶、あるいは紗紀なら和成の数倍の速度で読こなせるのだろうが、無いものねだりをしても仕方なかつた。仮に仕事を交代したとして、術者ではない和成や皐月に「術が設置されていないか」を探し回るのは不可能なのである。

「……これは」

和成はとあるページでその手を止める。

「……昭和の始めの話だ。さつきのと似ているが、日本軍が食料を求めてこの村に来たらしい。好き放題略奪を繰り返し、村の畠を占有していった。だが」

声に出して読みながら確信めいたものを得始めていた。そこに書かれていた内容は、常識的には考えられないような異常な案件だったからである。

「次の日に乗ってきた戦車が全滅。指揮官は死亡し、築いていた途中だつた陣地が炎上」

「それは爆発物とかじゃないの?」

「日鬼村に戦車を爆破できる武器があつたとは考えにくい」

「当代の巫女がカグツチを降ろし カグツチ?」

カグツチと言えば日本神話に登場する高名な神様である。テレビゲームやカードゲームでも見かけるほどメジャーな火の神様で、実際のところ出産した瞬間に父親に殺されたという悲劇の経歴を持つていた。

皐月と顔を見合わせる。

「神降ろし？」

巫女が神様を降ろすための神事を行つてゐる映像がテレビなどで流れることがあるが、和成たちの「常識」からすればそれはそう難しいことではないように思われた。紗紀は日鬼村で巫女のような仕事をしているが、祭りのたびに神様を降ろしてゐる。実際に光源もないのに光つたり、謎の踊りを踊り始めることがあったので、攻撃的な能力を引き出してくれることも不可能ではなさそうだった。

「まあ神様が犯人だとしたらあの威力も考えられる……かな」

「誰がやつたんだ？ 巫女つて紗紀と紗紀の家族しかいないんだろ？」

綾織家は俗っぽい言い方をすれば「巫女」の一族だ。神社もなければ巫女服も着てはいないが、相変わらず神様と交信することはできるらしい。和成は神様を見たことも、声を聞いた事もなかつたが、呼び出すために舞つていた紗紀が綺麗だつたことは覚えてる。

「いや……でも和成。例えば昨日の九尾つてさ、私たちにも何か来たなつていうのが分かつたじやない。だつたらカグツチクラスを降ろしたら一発でバレる気がしない？」

「結界を張つていたんじやないのか」

「それでも分かると思う」

「加えて隠蔽だ」

受け答えをしながらだんだんと非現実的になつていくことに気づいていた。神様を降ろすといったって、実際には目に見えるわけではないのだ。もちろん綾織家の巫女の全力を見たことがあるわけではないが、たかが神様というところが和成のもつた。

「神降ろし、結界、更にその隠蔽……できるの？ 紗紀のスペックが結構ぶつ飛んでるのは知つてるんだけどさ、流石にそれはねえ。紗紀ちゃんの細腕がダンプを叩き潰すのをイメージしろつていうのはかなり難しい話なんだけど」

「九尾をぶつ飛ばした鬼が言う台詞かよ」

「カズ君の協力あつてのことよ」

皐月が微笑んだ。

「とりあえずもう少し読み進めてみよつか。何かわかるかもしけないし」

「そうだな」  
「一人で日が暮れるまで資料を読みあさつたが、それから先にも同じような事実を幾つか見いだすことができた。

もちろん確定事項ではなく、何より「当代の巫女」の記述を重視すると紗紀を犯人扱いしてしまうような気がして嫌だつたが、今回の事件とも何らかの関連性がありそこからこれは颯たちに伝えるべきだらうと判断した。

「あーあー、結局分からず仕舞いかあ」

皐月がそういってたたみに倒れこんだ。

「それらしいもののピックアップはできたんだ。あとは颯と紗紀に任せよう」

「そうね。悩んでも仕方ないか」

皐月が短く息を吐いて立ち上がる。大きく伸びをしながら、

「単純に祟りとかそういう理由なら、いつそ墓を荒らして祠を壊して……」

「おいおい」

「冗談よ冗談。まあご先祖様が怒つてるのも分かるんだけどね……」

「不甲斐ないわけじゃないさ。ルールに適応して生きるべきなんだ。力づくで押し通す時代じゃないってことだろ」

和成は目を窓の外に向けた。

世界でも有数の美しい森が、地平線の果てまで広がっていた。

## 九・破滅へのレ・プレリュード

前日の晩は早めに寝て休息をとつた和成は、翌朝に何の事件も起つていない事に胸を撫で下ろした。皐月が県庁に連絡して確認をとつたところ、とりあえず今日は建設続行の予定はないらしい。流石に作業者一台、作業員の一人も居ない状況では、誰も襲う相手がないというところだろう。

昨日の件は紗紀に伝えるのがやや躊躇われたため、夕食が終わつてから颶の方にそれとなく伝えておいた。今日は一人が史書の方を見るというので、和成と皐月はとりあえずのところフリーだった。何か起こるかも知れないという危機感がないわけではないが、異形の襲撃もなければ町の破壊もなかつたためしばらくは平氣だらうというのが村民たちの見立てである。

「なあ、皐月」

「うん？ どうしたのカズ君」

「町、行くか」

和成の言葉に皐月が驚いた顔をする。

「急にどうしたの？」

「いやせ、最近こちやんこちやんしてゐるだろ。これからもこちやんつく可能性があるし……」「ホールディングウイークまだもあるしさ、良かつたらどうかなつて」

「さりげなく男らしさをアピールと」

「話の腰を折りやがつて」

溜息をついて首を振る和成を見て、皐月が声をあげて笑つた。

「照れ隠しよ照れ隠し。じやあ付き合つてもらつちやおうかな。買出ししたいものあるしね」

「どこ行く？」

「どいつもこいつもねえ……遠出も疲れるし、何かあつたとき面倒だし。やつぱり千山ショッピングセンターかなあ。あそこなら荷物せんさん

もすぐ運べるし」「

「まあそだよな」

千山とは日鬼村から車で一時間半ほどとのところにある地名で、皐月の兄の弥生が住んでいる場所でもあった。大手のデパートがある繁華街の中では日鬼村から一番近い。

「兄さんにも顔出しひきたいしね。よつし、決まつたらすぐ行こ。準備してくる」

それだけ言い残すと皐月は家から飛び出していった。程なくしてホーネットの排気音が和成の耳に響いてくる。

「……気が早いな」

居間で一人苦笑しながら和成は準備を進めた。洋服には無頓着で余り種類を持つていない。色調も暗いものが多く若者らしくないと言わることがしそつちゅうだつた。

巖原田に見なくても皐月はなかなかの美人である。顔立ちの整つた颯ならともかく、自分が隣を歩くとなるといろいろと考えてしまう。

都内のあちこち店で何も考えずに買った洋服を、いろいろな組み合わせて試着していく。

ポケットに手を突っ込んでみたり、煙草をすうようなポージングをつけながら、最終的に黒ずくめの格好になる。

「うむ」

鏡に映る姿に満足気に頷いてから、和成は家を出て行つた。

「

「……で、貴方は一体何と戦うつもりなの？」

着替えをして戻ってきた皐月は、かやぶき屋根の家をバックにたたずむ異様な格好をした和成を見て苦言を呈した。

「変か？」

レザーフィールのパンツ。上には黒いジャケットを着込み、さらに膝丈より長いロングコートを羽織つてゐる。極めつけに足に

は黒い軍用ブーツを履いていた。

「……まあなんでもいいよ。好きならね。バイオハザードのキャラみたいだけど」

呆れきった皐月の声に和成は表情を曇らせる。やはり自分にはセンスがないと再確認しつつ、しかしながら悪くない服装ではないだろうかと思い直す。

皐月に手を引かれて玄関前に出てみれば、なぜかホーネットが停車してあつた。和成は疑問の声をあげる。

「あれ？ 電車で行くんじゃないのか？」

「電話したらなんか兄さんが村に来る氣があるっていつてたから。荷物を持つてつてくれるなら電車じゃなくてもいいかなと思つて」「じゃあなんでライダースジャケットにジーンズなんだ」バイク乗りとしては間違つた服装ではないものの、そこは和成も男である。女性ライダーには期待すべき服装があるのだ。

「どうこいつこと？ ああ、ライダースーツ？ あんな格好で食品売り場は歩けないでしょ？」

「なんて残念なんだ」

本当に残念だ、と呟いた和成を見て、皐月が突つ込みをいれる。

「なんかキヤラ変わつてない？」

「昨日颶からもう少し短絡的で軽薄になつたほうがいいっていわれたからさ」

「その『』みたいなアドバイスは今すぐ忘れなさい。といつかあれでしょ、ただ単に私のバイクに乗りたくないだけじゃなくて」

「…………いいや、それはない」

「今すつづく悩んだでしょ。絶対本心からのセリフじゃないよね

それ

「こいつか」

皐月の言葉を華麗に受け流し、和成は道路とは違つ方向へ足を進める。

「何で駅の方に歩き始めてるわけ！」

「だつてこええじゃん！ 百八十キロも出るんだろー？」「

「出るけど出さないから平気よー。それに一昨日の戦闘のときには平気な顔してたじゃん！」「

「有事の際は別なんだよ！」「

お互い主張を繰り返すが、スピード狂とビビリでは根本的に話が通じ合うことがない。

「八十キロ以上出さないって約束できるか？」「

「わかった。百二十キロね」

いつものことだが日本語が通じていなかつた。そもそも村から千山へ繋がる国道の制限速度は六十キロであり、八十キロでも二十キロオーバーである。

「聴力検査をして来い。お前な、高速道路じゃないんだぞ？」

「誰も走つてないから平気よ。腕を信頼しなさいな」

「……分かつた、分かつたよ」

これ以上は議論の余地がないと判断し、和成は疲れ切つた声でそういつて後部座席に跨つた。

「しつかりつかまつててね」「

「幼馴染の体を抱けと」

疲れていっても茶化すチャンスだけは見逃さない。ついつい下ネタ混じりの言葉遊びに走つてしまつのは誰の癖がうつったのだろうか。

「余分な事を言わないやらない限りは振り落とさないから」「了解した」

和成は皐月の腰にしつかり手を回した。

「それじゃ、行きますか」

皐月が一気にエンジンを回す。

蜂が唸りをあげて一人の体を運んでいく。桜を散らす春の息吹に喧嘩を売るように向かい風を突つ切つた。

流れているBGMは皐月の好みから考へるならおとなしめの物だつた。

「随分と大人しい曲だな。俺は好きな感じだけど」

「マイラーのスピードモード」

「どうりで良い曲な訳だ」

キレのあるテンポに身を委ねていると、マイケル・ジャクソンの踊っている様子が脳裏に浮かんでくる。

村の出口はすぐそこだった。時速百キロで突っ走る女子高生を咎めるものではない。

やや耳障りに感じていたホーネットの唸り声も、今はとても心地よかつた。

「いやつはう！ 右曲がるよー！」

皐月も快調なようである。それでも視認性の悪い場所ではきちんとスピードを落としている。急なスピードのアップダウンをしないように、カーブの時は警告するなど、リアシートが後部座席が不慣れな和成を意識してくれているようだった。

和成もなんとか皐月の動きに合わせる。初心者は体が倒れるたびに逆方向に起こしそうになってしまい、それをやると操縦している方のバランスを崩しかねない。倒れるのではないかという恐怖と戦いながら、必死に上体を左右に動かした。

「良い感じ良い感じ」

二十分も行つたところで海沿いの道に入った。

右側にある海からは浜風が匂い立ち、左に広がる山は若じ青色に染まっていた。

日常生活では体験し得ない疾走感が全身を駆け巡っていた。異能を使って自分で加速しているときは違う、「自分は動いていない」という心地良い浮遊感が感じられた。

「楽しんでる？」

皐月が声をかけてくる。

「かなりね」

その言葉に嘘は無かつた。

「一緒にツーリング出来るといいね」

「ああ」

トンネルに差し掛かつてスピードを少し落とした。

体が前に傾いで皐月に密着する形になる。幼馴染の柔らかい体の感触に少しどぎマギしながら、トンネルの橙色の光を見送った。

「この曲も聞いた事があるぞ。ドーラエモオオオン…って叫ぶやつだよな」

「オール・アイ・ウォントって言つてるのよ。オフスプリングの曲。ゲームで使われてるから知つてるだろ」

「クレイジー・タクシーだろ？ 弥生兄さんがやたらと氣に入つてたよな。お前の方が上手かつたよな」

そこまで言つて自分が失言したこと気に入つて。

しかし訂正するには既に遅く、皐月がスピードをあげ始めていた。

「あの、皐月さん」

「クレエエエイズイタクスイー」

妙な発音の英語と共に、ぐんぐんと速度を上げていく。和成の全身に鳥肌がたつていた。

皐月の家には大量のゲームがあつた。そのほとんどが車かバイクのレーシングゲームであり、どれで勝負しても和成は勝つた試しがない。ゲームでは現実世界よりさらに田茶苦茶なドライビングを見せていた。

「やめろー。ゲームの世界と混同するのだけは本当にやめて…」「ゲームでも失敗したことなんてないから平氣よー。地獄ラインだし！」

それを聞いて和成の表情は一際深刻さを増した。

日鬼村から千山までの国道には、「地獄ライン」と呼ばれる直線五キロが続く地点がある。

県内の走り屋たちがメーターの記録を競つて走つてている場所だ。

「レツ・ゴー…！」

「うあああああああああ！」

百四十キロを超えていくメーターを見ながら、和成は少しづつ意識が遠のいていくを感じ取っていた。

颯は和成の東京土産を囁りながらお茶をする。紗紀の祖母が出したくれた茶の味は格別に甘く、茶の知識などほとんどない颯でもそれが玉露だということがすぐにわかるほどだった。

「これが神降ろしに関係する資料です……随分とピックアップしてくれたみたいですね」

紗紀が目の前に資料の山を積む。昨日は村内に術が仕掛けられないか見回りするのに忙しかったが、和成と朧月が下準備に近いことを終わらせてくれたとのことだった。

「なんか悪かつたな。あいつら、古文は苦手だうに」

「……何か私の家が迷惑をかけているのでしょうか」

「んなわけねーだろ。仮にそうだつたとしても、紗紀には関係ねえ話だろ？ まだ何も分かつてないんだからそんなに沈むことはないんだよ。カズやサツツーだつて犯人探しをしてるわけじゃねえ。要するにこれが人を巻き込んでたらヤバいから、そこんところどうなのよつて話だよ」

颯は和成から聞いた話をおおむね紗紀に伝えていた。神降ろしによる事件であるとしたら疑われるのは「当代の巫女」である紗紀だが、今伝えておいた方がいいと思つたから迷わず伝えたのだ。

「……ごめんな、何言つてるんだかわからんねーや」

颯は頭を搔いて顔を背ける。会話に内容を込めようとするけどいつも中身が伴わなくなる。紗紀を元気付けたいのに、どうしていつも適當なことしかいえないのだろうかと自分を責めた。

「いいえ。伝わりました。ありがとうございます」

笑顔にもどこか陰があつた。紗紀の笑顔を消した犯人がいるのなら、そいつの顔面を思い切りぶん殴つてやるつと思っていた。

「結構な量だな。まあ、一人がかりだしどうにでも

目前の紗紀が俯いたまま動かなかつた。

紗紀？」

「どうしたんだ？」

「……すいません、少し熱っぽくて」

颯はごく自然に紗紀の額に手をあてる。体温は普段から高めの颯であるが、それでも紗紀の額の方が熱かつた。

「熱あるじゃねえか！ 寝てろ寝てろー 布団はどこだ？」

「自分で……」

「いいんだよ。いねえならアレだが田の前にいるんだからいいじゃねえか。いなくても呼べばいいじゃねえか。それで布団はどこだ」

「一部屋隣の押し入れの中に」

「そこまで連れて行けばいいか」

「……この部屋にいても宜しいでしょつか」

「え……いいけどさ。とりあえず布団もつてくるな」

颯は手早く布団を抱えて運んでくる。自分の座っている位置の右手側に、ちょうど額がのぞけるような感じで布団を敷いた。

紗紀は私服のまま布団に潜り込む。スカートでは寒くないかと思つた颯だったが、動かすよりはマシだと思つてその上から毛布を掛けた。

「ごめんなさい」

布団から顔を出した紗紀が静かに呟く。

「いいからいいから。気にすんなって。いつ見ても国語系統は強いんだぜ」

疲れきつた顔色の紗紀はしばらく颯を眺めていたが、やがて小さく頷いた。

「……お願いします」

「お願いされた」

颯は毛布の上からポンポンと紗紀の腹あたりを叩く。

「セクハラのつもりじゃねえぞ」

「分かつてますよ」

紗紀は笑つて、少し咳き込んだ。

颯はポケットからタオル地のハンカチを取り出すと、

「水（Sui）」

それを水で濡らして、続く「冷」の一言で適当なところまで温度を下げる。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。そしておやすみなさい」

颯が史料に目を通し始めたときには紗紀はもう動かなくなっていた。どうやらよほど疲れていたらしい。

颯は中腰になつて紗紀の寝顔を少し眺めてから、史料調べを再度スタートする。

日鬼村の祟り。

言葉になると余りにも単純だが いろいろと疑問点が残つていた。

そもそも祟りなどといつものが実在するのだろうか。

和成や皐月は「科学的根拠が無い」という言い方をしていたが、颯にとっては「術としての根拠が無い」といえた。逆に言えば妖怪からも術者からも否定された出来事ということになる。あと残つているセンといえば、颯の頭の中には一つしかない。

時間差のトラップ。

自分たちの先祖が、この村が将来的に危険に陥つたときに術が発動するように仕組んでいたとしたらどうだろ？

先祖たちが住んでいた時代に解除し忘れたものが残つていると考えても構わない。

それならば「祟り」も理解可能だ。時間差で発動する術式だと考えればすんなりと理解できる。

「見落としは……ないか？」

いつになく真剣な顔で颯は資料をにらみつける。

発動したのはどういう術式だろうか。神を降ろすというのは口で言つだけなら簡単だが、実際にはとんでもなく難しい。

だとすれば巫女、あるいはそれに類する術者 紗紀のような人間が降ろしたと考えるのが一番分かりやすかった。

「……うん」

紗紀が苦しそうな声を漏らす。

思わず額に手を当てるが、どうやら熱はないようだ。

颯は首を振った。これだけ一緒にいる時間が長いのに、紗紀がいつも神降ろしなんていう大掛かりな術を組んでいる暇があるのでどうか。

何より紗紀が一人でやつたとは考えにくい。

「あー」

振り出しに戻る形になつた颯は、頭を強めに搔いた。

それでも冷静さは失わない。懐から折りたたまれたテスト用紙を取り出すと、その裏に思考をまとめていく。

ダンプカーが壊れていることから、何らかの術が行使されたことは間違いない。

恐らく神降ろしなどの人間外の力に頼るもの。

颯は整合性がある術式を組み立てていく。

十分ほどが経つたとき、その顔が苦悶に歪んだ。ダンプカーを破裂させる方法した犯人が誰なのか、九割の確信をもつて予想がついたからだ。

ならば紗紀の体調不良の原因は

「紗紀！ 起きろ！」

颯が立ち上がり叫ぶと、紗紀がびくりとして起き上がる。

「なんですか！？」

「母さんやおばあさん、今家にいたりするか？」

「いえ、いまはいません」

「つくつそ、まずいぞ……村から出よつ」

颯は紗紀の体を起き上がらせると、

「仕掛けが分かつた」

「ねえ、ここの竹細工ってどうして百円で売れるのかな」

皐月は百円均一で見つけた籠をしげしげと見つめていた。素材はおそらく竹ひごで、きつちりとツタ状の木が織り込まれていて、職人の技を感じさせる。和成も遊びで幾つか作ったことがあるが、一つ作るのにかなりの時間を要したものだった。

「中国で安い賃金で作ってる……って聞くけどな。百円っていつのはすごいよな」

町を歩いているといろいろなものに出会いつ。野菜などの食品や、木材などの資源の値段を高く感じる一方で、製品としてなりたつているものについてはその安さに驚いた。都会と田舎で物の価格に対する認識の乖離があるのでな。ノートパソコンが一円で販売できるのは、契約料金で徴収していくシステムだからであると和成も知っているが、それでもにわかには信じがたい価格である。

「便利になつたよな」

行き交う車を眺めながら和成がつぶやく。

「なーによ、急にどうしたの?」

「一時間弱　ってのは確かに便利って距離じゃないけど、それでも道路もバイクもなけりや考えられない距離だもんな。公害問題とかもあるけど、やっぱり便利だ」

「和成つてときどき、還暦過ぎた爺さんみたいなこといつもね。縁側で沢庵食べてたりするし」

「渋い男は嫌いかい」

「そんなことはないけどね」

皐月は笑う。

「でも……ちょっと寂しいかな。せっかく遊びに来て手もつないでくれないなんて」

「皐月……」

和成は寂しげな笑みを浮かべる皐月の方を神妙な顔つきで見つめた。

「繫げないだろ」

和成は両手に持つたビニール袋を持ち上げる。洋服や食品、百円均一で無駄に買ったおもちゃ、新作のゲームと、山のような荷物を持っていた。その九割五分は皐月が買った物である。当の皐月はと、いつと、「まだ買い物があるから」という理由で荷物は左手に提げた紙袋一つだけだ。

「おつとこまえ！」

皐月は笑いながら和成の背中を叩いた。

「調子がいいよな……つたく」

「はしゃいでる女は嫌い？」

「一緒にでかけてくれて楽しんでくれるんなら男はそれで満足だよ」

「うつそだー。女の子はティナーまでだけど、男はティナーまでが前菜でしょ？ 重要なのはそのあとで」

「参ったな、そんなつもりはないんだけど」

軽口を叩きながら一人で歩いていく。行き先は皐月の兄である百目鬼弥生の家であった。

皐月の話によると、既に勤めていたバイク屋を辞めて独立したことだ。輸入からメンテナンス、果ては改造までというバイクショップのオーナーとして頑張っているらしい。

「でも、久しぶりに出来て良かった。楽しかったよ、ありがとう」

「そうか。俺も」

和成が言葉を切つて背後を振り返った。

「どうしたの」

皐月も振り返つて神妙な顔つきになる。

通行人たちが驚いて二人が見ているほうを見るが、何もないと分かると怪訝な表情をして去つていく。

東西南北など意識して歩いてはいなかつたが、一人の目の先は日鬼村の方へ向いていた。

「……感じるか」

「うん」

互いに顔を見合わせる。

異形や異能者の中には、自分たちと同じものの気配を察知できる者が少くない。とはいっても、よほど索敵能力に優れた能力者以外には、反応が大きくない限り距離が離れていると分からぬ。そして和成と皐月はそこまで索敵に優れているわけではなかつた。つまり、この距離でも感じるほどの何かがいる。

和成が声をあげるよりも皐月がポケットから携帯を引き抜くほつが早かつた。

「私！ 今すぐ来て！ ショッピングモールの、うん、そう、セブンの前にいるから！」

それだけ言って皐月は携帯電話をポケットにしまい込む。

「誰にかけたんだ！？」

「和成。村のために命を駆ける覚悟はある？」

「ある！ 早く動こう！ 僕なら四十分で帰れる！」

「あんたが四十分で帰れるスピードで帰つたら消耗が激しくて有事に対応できないでしょ！」

「でも！」

「三十分で帰るわ」

「だからどうするんだ！？」

皐月が携帯電話を振つてみせる。和成ははじめこそ意味がわからぬといつた顔をしていたが、やがて皐月が誰に電話をかけたのか気がついた。

「命を駆ける覚悟はあるのよね」

「それしかないよな」

和成はそう呟いてあたりを見回し始めた。隣の皐月も落ち着かない様子で携帯の画面を見つめている。

一分ほど経つたとき、一人を突風が襲い、辺りの埃が全て舞い上がりつた。

田の前で停まっていたのはフェアレディZだった。メタリックレッドのボディーが陽光を受けてギラギラと輝き、タイヤや窓枠の黒が目立っていた。

車の趣味についてとやかく言つつもりはなかつたが、少なくともちょっとコンビニまでという町乗り用の車には見えない。いろいろと和成の偏見も混じつているが、改造しまくつて峠で最速を狙う人たちが乗るような車ではないだろうか。

「オウカズ。皐月。どうした？」

窓から半身を乗り出している青年は　百田鬼弥生、その人だつた。

窓枠に乗せている腕は和成の倍の太さを誇つていて、筋をつなぎ合わせたような凄まじい隆起が、日の光を受けて輝いていた。

百田鬼家の突然変異種とまで言われた弥生であつたが、目鼻立ちの整つた精悍な顔つきは、なるほど皐月と似ている部分もある。

「よく分からぬけど綾織が危ないんですね」

「なあにい！？ サキちゃんが！　とりあえず乗れ！　すつ飛ばしてやる！」

和成は少しだけ躊躇いを見せながら、皐月の後を追うように後部座席に乗り込んだ。

「大丈夫だよカズ君」

隣の皐月が手を握つてくる。

「二百超えてれば痛みも無いから

「……」

何が大丈夫なのか全く理解が出来なかつた。両腕で体を抱えるようにながら、和成は迫り来る絶望へと不安を募らせる。

今は市街地なので大したスピードは出していないが、もう一分もすれば山道に入る。

利用者がいない割りに幅の広い山の国道は、地域のスピード狂たちがレースをする絶好のサークットになつていた。

そういう考えているうちに山道に差し掛かる。

和成の田の前でスピードメーターの針がぐんぐんとあがつていつた。

制限スピードは確か六十キロだったが、現在はその倍の速度で飛ばしていた。

鬼の力を使つていないせいもあるが、それにしても標識が見えない速度というのは異常である。

「つちよつと早すぎませんかね！」

「バア口ウ！ 遊園地の「ゴーカート」だって百五十キロが出る時代だぜ！」

皐月と同じような冗談を飛ばしながら、弥生はアクセルを踏み込んでフェアレディを飛ばす。

ちらりと弥生の手元を見た和成は、スピードメーターを田にして見なければ良かつたと後悔した。

父親の自家用車のメーターは百八十キロまでだったが、弥生のフェアレディのメーターは三百キロまで田盛りがある。リミッターを外しているだけではなく、何らかの改造が施されているとみて間違ひなかつた。

「大丈夫……大丈夫」

皐月ですらうわごとを呟いていた。普段ならばからかうものの、今の和成にその余裕はない。

すでにメーターは一百キロ以上の値を叩き出している。新幹線顔負けの速度は、さながら走る棺桶といった状態だった。

もちろんこのスピードで平然と走れるのには理由がある。

一つは弥生が常に行き来している道であるため、その道を知り尽くしているということ。加えて弥生のドライビングテクニックが並外れて優れているということ。

そしてもう一つは

「おつと！」

レーサー顔負けのコーナリングを決めた弥生の車の脇をスレスレのところを白い乗用車が抜けていった。

車間は十センチもなかつただろう。

「つこえええ！」

「かすつた事もないから安心しな！」

弥生の腕も皐月と同じ「目」の能力であるが、そのルーツは祖母方の百々田鬼ではなく、祖父方の田田連だ。

皐月のような攻撃力こそないが、自分の体以外の場所に「目」を出現させることができるために、視認性の良さは皐月とは比較にならないほど優れている。

今も外部の外壁や車のボディなどに田の生成を繰り返している。そのためにカーブを曲がる際に死角にいる相手を認識して避けることができるのだ。

弥生はそれからも神がかつたコーナーリングを続けていく。対向車線などまったく眼中にないようで、とにかく最速のドリフトを決めながら疾走する。

「事故率ゼロだぜ？」

「事故つたら絶対に即死だもんね」

皐月が震える声をあげる。

「さすがは皐月だな、それでこそ俺の妹だ」

どうして褒めたのかよく分からなかつた。タイヤが擦れる甲高い音がするたびに、和成の意識も少しづつ磨り減つていく。

「この後の直線を待つてろよ」

弥生の宣言に和成が焦る。

地獄ライン。

皐月は百五十キロでやめたが、その兄はどうだらうか。車は新幹線や音と勝負するべきだと豪語する男が、音速の半分以下の速度で満足するとは到底思えない。

「止めてくださいよ！ 危ないですって！ 本当に！」

叫ぶ和成。だが、車が直線に差し掛かつた瞬間、弥生はアクセルを大きく踏み込んだ。

メーターが緩やかに上昇していく。

東京にいたころ乗った新幹線、「こだま」は確か最高時速三百キロだったなど、そんなことを思い出していた。

「ぎやあああああああー！」

「…………」

車内に和成の絶叫が響く。隣の皐月は生氣の失せた表情でシートにもたれかかっていた。

## 十一・雷撃の結界

颯は山吹の丘の中央で跪いていた。

この場所にいてはいけないと頭では理解しているものの、体がいうことを聞いてくれなかつた。

「クソ」

もう数百メートルも走れば術の効果圏外に達していたのかもしれない。今回の事件の性質を踏まえればそう考えるのが妥当だつた。術の仕掛けは考えてみれば至つて簡単なものだつた。神降ろしをするのではなく、させるもの。

即ち村内で神様を降ろせそうな出来そうな人間を検索し、その人間に強制的に術式を組ませる。神様を動かすよりは、人間一人を動かすほうがよほど簡単だ。

加えて降ろす先は術者本人ではない人間にする。割り振られたタスクに集中できるという利点があつた。

降ろした人物は綾織紗紀で間違いない。神を降ろせるだけの術の力と清純さを兼ね備えている人間は、綾織家のの人間以外にはいないのだから。

紗紀の発熱は、無意識下で術を勝手に使われていたことによるもの そう考えれば説明がついた。

神降ろしがどんな原因で発動したのかは分からぬ。ダンプカー やショベルカーに反応する術式であるのなら、日鬼川を通りかかつた家族連れの車でも破壊していただろう。そのことから颯は、起動のキーになつたのは村民の意志だらうと予想をつけていた。それならば納得がいく。

重永颯には神降ろしの対象となる格好の理由があつた。

作業車が破壊された前日に仕切りの杭を破壊しているのだ。これだけ多くの術者や妖怪がいるなかで自分が選ばれた原因はそ れだろう。

（性が悪いぜ、神様よお ）

颯が実際に行動していなくても他の誰かに神が降りてくる可能性はあった。その点では一つ良かったと思っていたが、残る問題は颯の異能と神との相性が良いということである。

恐らく今意識を神に奪われれば村内の誰も自分には勝てないだろう。皐月と和成と二対一で戦つことがあるが、あの二人すら自分に攻撃を当てることができないのだ。回避するだけの能力は、しかし力を持つてしまつたら一転して最強の存在へとステップアップできる。

おそらくもつと早く自殺しておけば良かつたのだろう。

だが颯はその選択をすることができなかつた。最後の最後で自分に向けた刃を止めてしまつたのだ。原因は明らかに 生きたいと願つたからだ。友人たちと、この村で、笑いながら明日を迎えると願つたから、自殺という手段に踏み切れなかつた。

ここまで来たら選択肢は一つしかなかつた。

「……なあ紗紀、殺してくれないか」

動けない状態では刃を自分に突き刺すことも叶わない。ならば、目の前の少女に。

顔を伏せたままの紗紀がそのまま口を開く。

「……そんな選択をするぐらいなら、このまま颯さんが町を荒らしてしまう方が幾分かマシです」

「なんだつて？」

紗紀の言葉に疑問を呈す。怒りの感情も混じつた声だった。

「おかしいですか？ 大切な人が死なないですむなら、そうでない人が死んだ方がいいでしよう」

「……そんなやり方で生き残つて楽しく生きられるかよ…」

「颯さんは結局自分のことしか考えていないんですね」「なにを」

口を開きかけた颯を紗紀の言葉が遮つた。

「殺せるわけないじゃないですか！ 逆の立場だつたらできる

つていうんですか！　じゃあ殺してやるよって言うんですか！　格好つけなくていいじゃないですか！　なんでたかがダム建設が原因で人が死ななくちゃ……いけないんですかッ！」

紗紀の絶叫に颯は口を閉じる。

薄暗い中でも分かるほど大粒の涙を流していた。

「俺は……」

「最後まで足搔けばいいじゃないですか！　貴方は……こんなところで死ぬために生まれてきたんじゃないでしょう……」

意識が侵食されていく。

颯は必死に神に　タケミカヅチに抵抗をしてみせる。

そう。タケミカヅチである。どうしてここまで高位の神が降りてくれるのか全く持つて理解不能ではあるが、古くはカグツチが降りてきたことを踏まえるならば致し方ないことなのだろう。

颯は脳内の八万文字以上の漢字の中から抵抗に使えそうな言葉を吐き出していく。八百万の神の中でも上から百番までには余裕で入る相手と、体の支配権を巡つてせめぎ合つ。

「…………俺は」

「颯さん！」

「紗紀……引け」

「いいんです。貴方になら、殺されても」

神の目標は恐らく県知事だろう。現に体がその方向へと引かれていることに気づいていた。作業車だけでは飽きたらず、ダム建設にまつわる全てを破壊するつもりだろうか。

紗紀の方へと伸びる手が止められない。

「冷静になれよ馬鹿野郎！」

和成は能力をほとんど使わず、素手で颯の顔面をぶん殴つた。鍛え上げられた体から放たれた一撃が、颯の体を丘の方へと吹き飛ばした。

中腹まで転がった体を皐月の触手が拘束する。

「まーたセクハラ？」

冗談をかます皐月の表情は、口調とは裏腹に苦しそうだった。暴れる颯の力が予想以上に強いらしい。どうやら憑依している神の影響は肉体的なものにまで及んでいるらしかった。

「……カズ！」

「気合い入れろよ颯！ 全力でぶん殴るから死ぬんじゃねえぞ！」

「あ……ああ……」

紗紀は言葉にならない声をあげた。

「タケミカヅチだな？」

和成の言葉に紗紀が頷く。紗紀が驚いたような声をあげた。

「わかつてたんですか……」

「道中で気づいたよ」

和成も大方の予想がついていた。紗紀の体調不良に気づけなかつたのは自分に落ち度がある。音を消して爆発させるなんてできる人間は村にただ一人。幾つもの力を使える重永颯だけだ。

おそらくは水分を閉じ込めた何かを雷撃の熱で爆発させたのだろう。

普通ならこんな少ない手かがりでは答えを見いだせないだろうが、和成は違つた。水蒸気爆発を教えたのが他ならぬ和成だつたからだ。

「止められますか」

「止めるさ。絶対に」

和成はそれだけいつて隣の皐月の体を抱き締めた。もはやなりふり構つていられる状況ではない。

「喰うぞ」

「うん。ね、キスして」

和成は優しく口づけをする。抱き留めるだけで意識を食うことができるわけではあるが、なにかを恐れているかのような皐月の顔を見てそうせずにはいられなかつた。

意識が混濁して思考にノイズが走る。しかしそれも一瞬で、すぐ

さま皇月の思考回路と自分のそれがリンクする。それだけで同化できるのは、ひとえに皇月との相性が良いからだらう。

「弥生さん！」

力なくうなだれる皇月の体を弥生に預ける。弥生が皇月の体を抱き、紗紀の手を引いてフュアレティの方まで駆けていった。

「行こうか」

（うん）

和成の意識の中に皇月の声が響く。幼なじみの触手を腕に宿して、両手に金碎棒を握り込んだ。

「ハヤテ！ やれるだけ神様に抵抗しろよ ！」

「無……茶だ！」

颯が触手を振りほどこうともがいでいた。意識はまだ本人のものであるらしく、不鮮明ながらも彼の声が聞こえてきた。

「かもな。俺もさつきから震えがとまらない。でもよ

和成は震える足を肩幅まで開いた。颯を真正面から睨み付ける。

「 親友や村を捨ててまで逃げ延びるぐらいなら死ぬね！」

「 カズツ！」

触手による拘束が解けたと同時に、和成は全速のスピードで颯の体を掴んだ。

暴れる颯の体をホールドしたまま空へと舞い上がる。山火事の危険性があるため山で戦うわけにもいかず、消去法で選んだ先は学校の校庭だった。

「 疾」

颯の体がするりと抜ける。地面に着地した颯へ左手の金碎棒を振るうが、颯は軽く二メートルほど飛び上がりつてそれを回避してみせた。

「 当たらないよな」

颯が最弱という触れ込みは「物理的な攻撃の威力が」という話である。

全力の颯が術を連続して使っている状態では、地上であろうが空

中であろうが好きなだけ加速と方向転換をすることができた。ゆえに金碎棒も触手も鬼火も通用しない。

だが勝つ手段はある。颶の頭を封じ込めて酸素を奪い尽くしてしまえば、そのときは自分に軍配があがるだろ？

空に雲が集まっているのを確認しながら、和成は自分の体に火をつけた。あらかじめフェアレディから抜き取つて被つていたガソリンに引火して、全身が炎に包まる。

それと同時に周囲の樹木や草木が萎縮して地面に倒れた。熱エネルギーをあたりから奪い去るため、回りのものは凍り付いて力を失う。

さらに両腕の触手の本数と長さを増強して展開する。雷撃を受けたときのアース線のかわりだつた。

その姿はまさに化け物。

伝承の「鬼」とは一線を画す怪異が、猛烈な噴煙をあげながらそこに存在していた。

（正面突破できそう？）

「無理だな。下手に当てたら骨折じゃすまないし、何より颶に攻撃を当てるのは理論的に考えて無理だ」

ふと、口内が炭酸飲料を飲んだときのような感覚に満たされた。次に雷撃が来ることを理解する。

（来るよ！）

意識を搖さぶる皐月の声が響く。

それとほぼ同時に、和成は両手の金碎棒を校庭に突き刺した。直後に天空から雷が落ちてくるが、それは和成からは大きく逸れて金碎棒にぶち当たる。

校庭の地面が弾け飛んだ。雷は水分が無い限り物理的に物を破壊することは難しいはずなのだが、それができているということはその威力が規格外だということだ。

（こんなの ねえ、本当に大丈夫！？）

焦げ付いた香りに顔をしかめながら、和成は努めて冷静に返事を

する。

「一発当たつたら即死だろうな」

雷撃は熱エネルギーそのものよりもその衝撃が恐ろしい。体のほとんどが水分で出来てているのは和成も普通の人間と同じである。あたつたら即死か、もしくはショックによつて行動不能に陥るだろう。どちらにせよ颶を野放しにしてしまうことには変わりなく、それはつまり村か県かが地図から消えることを意味している。

「かわせないこともないと思う」

和成は大気の温度に干渉して視界を歪めた。まずは蜃氣楼を発生させて位置関係を誤認させ、加えて発生させた陽炎によつて自分の姿そのものを捉えにくくする。ねじ曲がつた視界は和成も同様ではあるが

「皐月！ 触手を上に伸ばせ」

（え？ ああ、なるほどね！）

視界がどれだけ歪<sup>いびき</sup>なものになろうが、こちらには皐月という「田」がある。大気に影響を加えていない上空から颶の姿を確認することが可能であった。

「左！」

和成は全力でバックステップする。三十メートルほど後退し、高校の外壁をぶち壊しながら雷撃をやり過ごす。

校庭に詰まっていた建材が轟音を立てて辺りに飛び散つた。修復途中だつた高校は、和成が帰つてきて田撃した時とほぼ同じ状態になつていた。

「やつちまつた」

（今は生き残ることだけを考えて！）

「ああ」

和成は一階の窓ガラスを突き破つてプールの方に駆ける。身に纏つた炎の熱エネルギーをさらに増加させ、そのままプールの中に飛び込んだ。

爆発に近い勢いで大量の水蒸気が発生する。陽炎と蜃氣楼で歪ん

でいた視界が、大量の水蒸気によつて滅茶苦茶なものになる。

続けてあらかじめ位置を確認しておいたトラックの方へ飛び、その上に乗つていた材木を颯の方にぶちまけた。

脳内に皐月の困惑した声が響く。恐らく行動の意味を理解できないのだろう。和成はあろ「!」とかトラックを持ち上げて、それをプールに突つ込んだ。

（何してるの！？）

「こうするんだよ！」

超人的な腕力で、荷台一杯に入つた水を空中にぶちまける。その瞬間に水の熱エネルギーを奪い去つた。

空中を舞つていた水が一瞬にして凍りつき、巨大な氷柱が校庭に立ち上がる形となる。

その動作を瞬間的に何度も繰り返す。校庭は、氷の柱が幾つも並んでいるという異様な状況を示していた。

「颯は！」

（右斜め前四十メートル）

それを聞いて和成は後ろの方へ飛んだ。崩落していない部分の外壁を蹴つて加速すると、衝撃で空中を舞つていた金碎棒を右手でキヤッチし、颯の足元をなぎ払つつもりで金碎棒を大きく振つた。

（避雷針ね　くるよ！）

校庭に刺さつていたもう一本の金碎棒を素早く抜いてもう一度後方へと引き下がる。雷撃は氷柱の一つに命中し、氷柱が音を立てて砕け散つた。

「まず　」

視界の隅で颯が飛び上がるとしていた。空中に飛ばれてしまつと、せつかく酸素を減らしているというのに水の泡になつてしまつ可能性が高い。反応の遅れた和成の変わりに、皐月が右手の触手を操作して叩き落とした。

（ねえ、いまの颯の意識はどうなつてるの？）

「おそらくまだ思考能力はある。酸素を吸おうと意識的に飛んでい

るだろうから、なんとかたたき落とすように戦わなくちゃいけない。

だから 低酸素にして勝つのは十分に狙える

続く雷撃で氷柱の一つが粉々に吹き飛ぶ。

和成の方へ飛んできた氷の塊が、身に纏う炎に溶かされて白い霧になる。

「よし、上に展開してくれ！」

（おつけ、いくよ）

皐月はそう宣言してツタを頭上に展開した。氷柱と木材、瓦礫に囲まれたすり鉢状の空間がツタによって封鎖される。抜け出すための穴はいくつもあるものの、限られた穴を通り抜けられないようには攻撃することは不可能ではない。

颯の雷撃の手が止まつた。何をしているのか分からず牽制の金碎棒を振るが、皐月が心中で声をあげた。

（ 外、雷雲が凄いことになつてゐる！ 全部吹き飛ばすつもりみたい！）

「なんだつて？」

ドームのツタは地面に突き刺さつてゐるためにアースのかわりになつてゐることは間違いない。だが、全力で雷を落とされたら崩壊する危険性は十分にあつた。

颯のスピードは明らかに落ちてゐる。酸素計はもつてきていないが、常人ならいいかげんに倒れてもいい頃合いだらう。このままの状態を一分も維持できれば勝利は目前であるため、なんとしても呼吸のタイミングを与える訳にはいかなかつた。

何もできないまま雷撃がドームに落ちる。暴力的な雷撃が、ツタでできた天蓋を瞬時に爆裂させた。

「くつそ」

颯が空中へ飛び上がつたのを見ながら、和成も全身全霊でそれを追つた。皐月のツタを地上に突き刺して位置を修正しながら、なんとか颯の体を掴んで地面に叩きつける。

しかし既に呼吸をされてしまつたようだつた。いつもなると再び酸

素濃度の低い空気を吸わせなければならない。

倒れ込んだ姿勢の和成を振り払つて颯がもう一度飛び上がる。

逃げられる と思つたが、颯が空中で壁のような物にぶつかつて落下してきた。

(結界!)

「紗紀か!」

恐らく遠隔結界の類だろう。和成が酸素を奪うといつ戦い方をしていることを知つてゐるのだ。紗紀も参戦してくれてゐる。その思いが疲れ果てた和成の体に力を滾らせた。

しかしやはり限界だったのか 押さえ込もうとした和成がよろめいて転倒する。

「 な

(カズ君! カズ )

雷雲はまだ同じ大きさを保つてゐた。空中にいることからも、もう間に合わない。衝撃で氷柱の避雷針は全て崩れてしまつてゐた。死を確信した瞬間、雷撃が大きく逸れてまったく関係の無い方向にねじ曲がつた。

「 馬鹿、やつてんじや、ねえぞ。クソ、やつと支配権を奪い返したぜ」

颯が途切れ途切れにそう言葉にする。

「ハヤテ!」

「いいから早く酸素を奪え! ジヤねえと……!」

濃度を一気に下げた。空気を吸い込んだ颯の意識が途切れ、その場で倒れる。

「 ……勝つた、か

和成は息も切れ切れにそれだけ言つて、颯の方へ近寄つた。(早く戻つて )

皐月の声が途切れる。和成も足を止めていた。

颯の体の上に黄色のガス状の物体が浮遊していた。

その姿は徐々に実体を伴つた何かへと変わっていく。

白い貫頭衣、勾玉のアクセサリー、平たい鉄剣。おおよそ時代錯誤の格好も、しかし古代日本の神様だと言わなければ理解できないことはなかつた。

神々しくも禍々しいオーラ。

彼我の差は圧倒的だつた。象と蟻という比喩ですらまだ生温く、惑星と人間ですらまだ届かない。

「なあ……トーレ行けないかもしけねえ」  
（河童）「あら、え、カズ君（）

(何言つてゐるの? ねえ、カズ君?)

第三章 中国古典文学名著与现代传播学

背の岳三メートルを超えるような化け物に。角を持ち、赤い皮膚をした、誰もが想像するような人喰いの怪物に戻るための能力だ。祖父に頼み込み、血を吐くような努力の末に掴んだ「鬼に成る」という感覚。いつもはせいぜい体の一部分、人間として収まる範囲にしか行使していないそれを全身に使えば、あるいは目の前の神に勝てるのか。

無論  
一度と人に戻れないだろうという自覚もあった。

やるのなら早い方がいいだろう。目の前の神は未だプラズマのような状態だ。この先、どこかのタイミングで実体化する瞬間が訪れるはずである。狙い目はそこだ。

（ そう。じゃあ私も死のうかな）

「……何馬鹿な」と言つてゐるんだよ

（語入た立場） そんな簡単には抜けないんだが お前たちのためになら、って

「格好つけたいわけじゃない。犠牲は百より一の方がいいだろ」

（ほりね、ゼロを田指してな）

言われて和成は身を硬くした。

(カズ君なりだわねよ。限界までやれりよ)

「神様と人の身で殴り合うのかよ…………」

アリआで、いつの可能性がつくった。

何も殴り合いつ必要はない。勝率の低さはどちらも変わらないが、それでも少しでも高い方を選択しよう。

「喰うか」

それだけ宣言すると、田の前のタケミカヅチに手を伸ばして取り込んだ。

「

猛烈な吐き気と眩暈　　言ひ尽くせないほど様々な様な症状が体を蝕んでいくのが分かつた。

「ゲ

（何してるつあああ　　つ）

脳内の皐月の声にも悲鳴が混じる。リンクを切るのを忘れていたことを後悔する余裕は無かつた。

それでも物理的な攻撃が当たるかどうかすら分からぬ相手と殴り合つよりはマシな選択に思えた。もしにこで取り込むことに成功すれば、今後は神を相手取つても戦えるようになるかもしれない意識を繋ぎ止めながら、そんなことを考える。

皐月も、紗紀も、そして颯も。協力してここまでたどり着いたのだ。

ならばこには自分がやり遂げなくてはならないだろう。

（つあ……、か……ず、く）

皐月の声も苦しそうだった。全感覚を共有するといふことは、雷雲が巻き起こっていた。

（逃げ　　）

そう。自分はその場から逃げられない。タケミカヅチの狙いが自分の体である以上、確実に肉体に落としてくるだろう。もつ足も動きそうにもなく、仮に動いたところで周囲に遮蔽物らしいものもない。

ならば自分は　　ここで死ぬのか。

「皐月。痛いと思つけど、我慢してくれよ」

（……カズ君?）

和成は金碎棒を振り上げると、自分の腕に突き刺した。

右腕前腕に一本。

「あ、ッ……」

（何してるの！　ねえ！）

続けてもう一本を右足の大腿部に突き刺した。一本の金碎棒は地面に突き刺さり、和成の体を固定する形になる。

続けて右半身を焼き払った。

一瞬にして腕が炭化して黒くなる。

「　な、皇月　知ってる、か」

炭のような無定形炭素は電気を通さない。

だったら金属を地面まで通して、体を焼いてしまえばいい。

（ねえ！　カズく）

皇月の右腕をアース線がわりに配置したところで精神を遮断した。

落雷の直撃で死ぬのは十人に一人。

雷撃の威力は普通の雷と比較にならないが、姑息な手段ながら対策もたてた。やはり九割ぐらいの可能性で生き残ることが可能だろう。

天を割り裂く黄金が、轟音とともに和成の体に襲いかかつた。

## 十三・ルーラルレジエンド！

皐月は自分の体に意識が戻るなり、弥生に頼んでフュアレティを飛ばしてもらった。

校庭に近づいてまず田に入ったのは体中傷だらけの颶だった。なんとか歩ける状態ではあつたものの、呼吸も辛いといった様子だつたため、弥生が素早く颶を運び出し駆けつけてきた村民に身柄を引き渡した。

問題は和成だった。

「……これじゃあ近寄れないぞ！」

「空からも無理！ どうなつてるの…」

村民の怒号が聞こえてくる中、皐月は紗紀に電話をして自らの体に結界を張る。

焦土と化した校庭の瓦礫をかき分けて進んでいった先で見た物は

「 カズ君！」

右半身に大やけどを負つた和成の姿だった。

右手の肘から先と右足を失い、全身にかなり大きな火傷を負つていた。しかし本人の全身の発熱が酷く運ぶる状態ではない。体を保護するためなのか無意識に鬼の力を発動しているらしく、近づけるのは同族の皐月と弥生ぐらいのものであつた。

「あああ、あ……」

左手の脈を取れば、たしかに命の炎は感じられた。しかしつ消えてもおかしくないような灯である。

「なんで……わけのわからないといひで格好つけたりするの」

少年から返事はない。

しかし和成が鬼の力ごと自分を引き剥がした理由は簡単に予想がついた。

恐らくは 右手を貫く痛みと、その後の雷撃の衝撃の感覚を臘月と共有したくなかったからだ。

右腕右足の方は臘月もその痛みを感じていた。和成はもつと早く遮断したかったようだが、混濁する意識の中ではあれが精一杯だったのだろう。

「つきあってくれるんだよね」

「一晩中和成の手を握つてその場にいた。

「……………カズ君」

涙が地に落ちて和成の熱で蒸発する。

朝になり熱が引いてきたところで、血室まで背負つて連れて行つた。背中に背負つた和成の心音だけが、臘月にとつての全てだつた。

「……………臘月？」

和成はぼやけた視界の中に少女の姿を捉えた。

「ここはどこなのか。自分は何をしているのか 少年が気になつたのはそんな些細なことではない。

「泣いてるのか？」

なぜ泣いているのだろうか。

「泣いて……ない。泣いて、ないよ。カズ君、そういうの嫌いだもんね」

「……………」

和成は何の言葉もかけられなかつた。

そこまできてやつと、今の自分の状況を理解する。

「……………颯はどうなつた」

「カズ君の勝ちだよ……今は病院にいる」

「そうか」

「……………」

それを聞いて和成は安心する。

少し大人びたかと思っていた幼なじみは、和成が思い出せる一番

古い記憶とダブるぐらい弱々しい姿を見せていた。

腕を失ったことは全く後悔していない。不便であることは間違いないでも、義手も発達していることだしなんとでもなるだろ？と思つていた。

しかしこうして幼なじみを悲しませてしまつと、自分の判断が間違つていたように思えてしまつ。かといってあそこで直撃を受けていたら自分は死んでいただろ？ そうなれば臯月はもつと悲しんだはずだつた。

「なあ、臯月」

「……なに？ ご飯かな？ 作つてあるから、待つてね」

顔を隠すようにして臯月が立ち上がる。

いや、これは

和成もあらうことかひょいと立ち上がつた。

続けて背を向ける臯月の胸に手を伸ばした。 左手ではなく、右手でだ。

柔らかい感触が手にある。指の動きはどうだらうか。静かに握つた。動きも十分だ。力を込めても平氣だつた。

「……え？」

「生えた」

臯月の左手が首に伸びる。首が思いつきりホールドされたせいで、顔を背けようにも背けられない。

右手が頬に迫り

甲高い音を鳴らした。

それから体を抱きしめられた。

「バカッ」

「わるい」

「ばか、ほんつとうに、バカ！」

胸の辺りが湿つていいくを感じながら、和成も臯月の体を抱きしめた。

「……まだいてえな」

和成は左の頬をさする。随分前に叩かれたといふのに、出てくるときに鏡で見たときはまだ赤い手形がついていた。調子に乗ったのは自分なので仕方がなかつた。

なんとなく場を和ませようと思つて 下ネタに走つたのだった。もちろん皐月の胸を触つて、握つてみたかつたという気持ちがなかつたかといわれれば嘘になるが、あの場でおふざけを混ぜないともつと湿っぽくなつてしまつ気がしたからだ。

「……あー、また逃げられた」

和成は日鬼川の下流で、麦わら帽子を被つて釣りをしていた。

その隣に座つているのは颯である。病院で目を覚ますなり窓から脱出し、術を使って空を舞い山を走りながら日鬼村まで帰還していた。

しかしその颯ですら、和成の腕が無くなり、その後に生えたという話を聞いたときは流石に面食らつてゐるようだつた。

右足の方も同じである。むしろ左足よりも毛が薄く綺麗な状態だつた。筋肉は落ちているらしいものの、歩くのに支障はない。飛んだり跳ねたりしてみたが、バランス感覚が狂つていてバック宙ができなかつたこと以外は特に問題がなかつた。

颯と合流して高校の方へ向かうと、修繕のために集まつていた村民たちに奇跡的なタフネスさを呆れられ、学校を破壊した件で怒られた。

和成も分かつてゐる。本当はみんな心配していくくれたのだ。作業を手伝おうとしたところ、先輩から後輩から同級生から教師から総スカンを食らい、お前らは釣りでもしてると釣り竿を渡されて今に至つてゐるのだから。

「骨折するとか、関節が訳の分からぬ方向に曲がるよにならんだろ？ ちょっと楽しみじゃね」

「ボクシングとかで変な回転のパンチとか出せるのかな」「そうに違いねえな……おおいカズ！　きた！　きたぞ！　これはマグロにちがいない！」

「海魚が釣れるわけないだろ！」  
突っ込みながら颯に加勢する。

「…………頭骨じゃないか？」

「まつさかあ あああああああー!? 頭骨じやねえか! やるよ

「おはようございます。」

「俺を？」

「骨を！」

近くに小さなお墓を作つてその骨を埋めた和成は、手を合わせて少しの間黙祷をした。

いつの時代かは知らないが、希に起こる田鬼川の激流に巻き込まれた遺体なのだろう。

えか？」

隣の颯が神妙な顔つきでそう持ちかけてくる。

「じゃんなんだだ？」「

颯の話を聞いていた和成の目が見開かれる。

「お前…… ただの馬鹿じゃないんだな」

「えー、流すの？ 僕が馬鹿か馬鹿でないかという重要な話が、颯の声を背中に受けながら、和成は紗紀の方へと歩を進めた。

颯は脚力を強化する術を使い、和成も鬼の身体能力を生かす。病み上がりの二人は時速八十キロというチーターも真っ青の速度で国道を走っていた。

「到着！」

紗紀の祖母に話をつけて、書類倉庫の中へと足を踏み入れる。探しているのは地図だった。

「ヒュー、こいつだ」

颯が目の前で地図を開く。

「パーカクトだな」

「おうよ

それを持つて高校の方へと駆けていく。和成の手には金碎棒が握られていた。もしもの時のために紗紀の家に置いてあるスペアである。

颯も珍しくお札のような紙を大量にポケットに突っ込んでいた。かなり達筆な字ですらすらと言葉を書いていく。そのどれもがひたすら「爆」「削」といったような物騒なものばかりだった。

「懲りずにまた来たぜ！」

校庭の中央で颯が大声を上げる。周囲で作業をしていたクラスメイトをはじめとする村民たちがその方向を振り向いた。

驚いている目の前で、和成は地面に向けて金碎棒を思い切り振り下ろす。

強烈な衝撃が辺りを襲う。地面に大穴が空いていた。

「え ちょっと！ カズとハヤテじゃねえか！ 何してんだよお前ら！」

一瞬の出来事に啞然としていた生徒たちが次々に声をあげる。

「まあ見てろつて！ ダム計画をつぶせる方法を思いついたんだよ！ 話に乗る気がある奴は手伝え！ つまりだな」

颯の言葉に生徒たちの目が輝いた。教員や作業をしている大人たちは困惑の表情をしていたが、颯と和成はそれを無視して破壊活動を続ける。

「そこぶつ壊して！」

「そこもぶつ壊して！」

酷い指令を飛ばす一人の声が、村中を荒らしていくかのように見えた。

それから一週間して 事態は急変する。

建設作業員も、県知事の男も、建設会社のメンバーも 干上がった川を見つめて誰もが唖然とした表情をしていた。

「こんな馬鹿な事があるか！ 貴方たちは一体何を

怒声をあげる県知事らしい男に向けて和成は静電気レベルの雷撃を放つ。

「ぎやあ！」

声を上げて周囲を見回すのを見届けてから、旧日鬼川を後にした。堪えきれないといった様子の颯がゲラゲラと下品な笑い声をあげる。

「いえーい大成功！ クソゼネコンめ地獄に落ちろー！」

傍らの紗紀が不満そうな顔をした。

「颯さん、言葉が汚いです」

「糞尿まみれの建築会社は地獄に落ちるといいのですわ！」

颯は川の方に中指を突き立てて、ぐへへ、と笑った。

「それはそれでおかしい」

地獄のような夜から一週間が経つて、日鬼川のダム建設計画は頓挫していた。

颯の提案を受けて和成たちが実行したことは「川の位置を変える」という大胆なものだつた。思いついたのは、奇しくもこの間坑道跡を発見した重永颯その人である。

村の下を走る地下坑道を地上に露出させ、そこに水を流す計画を

立てた。谷まで繋がつていいので川としては申し分なかつた。実際にできるのかどうか、下流の魚に影響は出ないかどうかを話し合つてゐる余裕はなかつたが、その日のうちに村長の許可を得るに至つていた。

一週間という短い時間ながら、各地に散らばつていた村出身の学者まで巻き込んで議論を交わし、坑道を下地にしてパーソナルな人工川を作り上げた。

その結果はひとまず成功といつていいだらう。

川幅をきちんと考へて整備したおかげで、下流の魚類にも影響は出なかつたようだ。谷にあつた山草類は、皐月の触手で地面<sup>じめん</sup>と削り取つて移動した。大量の木も同様である。

現代の技術をもつてしても不可能な芸当<sup>げいとう</sup>も、村の人間にとつては造作もないことだつた。

ダムなど作れるはずもない。川そのものが消えてしまつては、水も溜めようがないのだ。

山吹のなくなつてしまつた山吹の丘には、立派な祠<sup>ちよつちよ</sup>が佇立してゐた。颯と和成が協力してつくつたもので、以前にあつた祠と同様の機能を備えている。

丘周辺の整備は和成たちに任されていた。山吹の種を撒き、小さなカツラの苗を植えて、いつかは以前のような景色を取り戻してくれるだろつ。

「飯だー！」

颯が叫ぶ。

「うるさいですよ

「ゾンデレの紗紀ちゃん愛してゐよーー」

なおも黙る気配のない颯に向けてピコハンが振り下ろされるが、颯は治つた右手でそれをガードした。

「はつはつは。もつピコハンはきかね、いて！」

紗紀は左手にもピコハンを持っていた。

「甘いですよ、颯さん」

「刀流とは卑怯なありい！」

颯が大仰な動作で地面に倒れる。和成も真似をして倒れこんだ。

「おお？ どうした相棒よ」

「どうもしなさい。……空が青いな

「だな」

颯と顔を見合わせてニヤニヤと笑う。

「きもちわるい」

皐月の毒もいつもどおりだった。それにビンが安心感を覚えながら、和成は満足気に笑う。

「そんなことないよ！」

「まあそれでも構わないじゃないかハヤテ君」

「なに悟ってるんだよカズ！ そんなキヤラじやねえだろ！」

空はどうこまでも青かった。それはこの場に流れる空気はにも言えることだらう。

明日からは待ちに待つた日鬼村での高校生活である。本校舎は修復が終わっていなかったためにしばらくは誰かの家を借りて授業をすることになりそうだが、それはそれで面白そうだと和成は考える。

「平和だなー！ 平和だなー！」

「後は颯さんがいなければ……」

「そいつはひでえ！」

「自業自得だね」

友人たちの声を聞きながら、和成は静かに目を閉じた。

## あとがき

あとがき  
ライトノベルらしくライトノベルを、といつことで書き上げた一本でした。

構想から完成は2004年前後と古い作品ですので、昨今のライトノベルと比較すれば古臭くありきたりな内容かとは思いますが、最後までおつきあいいただき誠にありがとうございました。

## 自己評価

作り込みの甘さ・荒さが目立つことは否めません。  
コメディ・恋愛・戦闘を軽めに交えつつ書いていくスタイルが確立した作品であるように思います。

「明確な敵の不在」・「発展しない恋愛」、またキャラクターに一般人や初心者を混ぜないために作品に入つていけないなど「閉鎖的なコミュニティ」になってしまっている部分が多くあり、そして最近仕上げた作品でも未解決になつてている場合が少なくありません。  
ただし、低学年の児童向けコミック誌のような勢いありき・勧善懲悪ありき、という形で書きされたことはひとつ満足しています。

## 他作品との繋がりは?

皐月の兄、弥生はカスタムショップのオーナーとしてときたま顔を出すことがあります。

高校一年の頃は村外にいた和成も別作品のサブキャラで出でいますが、それはまた別の機会に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n82851/>

---

ルーラルレジェンド!!!

2011年3月21日11時41分発行